
漆黒と黄金の物語

菊沢みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒と黄金の物語

【Nコード】

N3889G

【作者名】

菊沢みかん

【あらすじ】

古の時代。ヴィドールは、東の獅子サファルと西の大鷹ガサラが二大国として治められていた。ある日、ガサラ国ダーウインの侯爵息女ウエンデイのもとに継母としてある親子が現れ、彼女の運命の歯車が…。シスコンの兄や天然なヒロインなど、さまざまな人の出会いから成長していく、異世界ファンタジー。

プロローグ

「アラン様、ウエンディ様！早く城を出る支度を。急いでください！」

二人の乳母のカレンは、真夜中、ダーウィン侯爵家の子息 アラン・ダーウィンと息女 ウエンディ・ダーウインを起こし、城を出る準備をさせていた。

「母君であられるシーフ様が数時間前、バイン卿と密談しておられました。アラン様とウエンディ様を明朝…暗殺すると。ですから、日が昇らぬうちにお逃げください」

「カレンも悪政が始まる前にここを出てください。さあ行くぞ、ウインディ」

「カレン…」

マントと少しの荷物を持ち、アランはためらい気味のウインディの手を引き、部屋を出ていった。

カレンは窓のそばへ歩み寄ると、一人雲間からのぞいた黄金に光る月に祈った。二人の無事を。

二人は雨の中、アランの愛馬イーザに乗り、国境の境の森を駆け抜けていた。

「ウィンディ…いつまで泣いているんだ」

馬を止め、背中にしがみついて泣いているウィンディを振り返りながら言った。

「だって…もうお城も故郷も全てをあの人に取られてしまったわ…」

「大丈夫…強くなって…取り返そうな」

「絶対に…」

アランの言葉は力強く、背中も大きく感じた。

ウィンディは涙を拭い、彼女と同じ空色の目を見上げて言った。

「ええ」

一章

ガサラ国ダーウィン領は、ステイブ・ダーウィンによって治められていた。

そして、侯爵には二人の子供がいた。妻は二人目の子供を産んだ時に亡くなった。

侯爵は、息子の名をアラン、娘の名をウエンディと名付け、育てていた。

アランは父から受け継いだ銀の髪、ウエンディは母から受け継いだ金の髪をしていた。

唯一同じだったのは、空のように澄んだ青色の瞳だけだろう。

アランの誕生日である日のこと。

「アラン、十七の誕生日おめでとう！はいっ」

ウエンディは、彼女の髪色のような金のリボンを巻いた細長い箱をアランに差し出した。

「何だ？去年はお世辞でも美味しいなんて言えなかったパンだったが。食べ物だったら承知しないぞ」

からかいながら、アランは受け取った。

「失礼ねっ。あれから一生懸命頑張っているんだから。まあ、開けてよ」

すると、中に入っていたのは、猫の目ほどの傷一つ無い青の透明な石がかかった首飾りだった。

「アズライトか…?」

「たぶんね。この間行つた乗馬の時、木にこれが引つ掛かっていたの。綺麗だったから手に入れようと思つたら風が吹いてきて、花の上にちよつと落ちたのよ」

「ほお…」

光に透かして見ていたアランは、興味深げにウエンディを見つめた。

「そしたらね、花の中にも同じようなものがあつて。だから、一つはアランに。もう一つは私が…」

首にかかっていた首飾りを引つ張り出すと、桃色の透明な石がかかっていた。

「ローズクォーツか。それは、神からの賜物かもしれないな。ありがとう」

アランの首に提げていると、扉が開いた。

「若様、姫様。侯爵がお呼びです」

「今行くわ、カレン」

母を幼い頃に亡くした二人にとってカレンは、乳母であると共に母親のような存在であった。いや、ステイブはガサラ国の重役にも就いていて、都とダーウィン領を往き来したりして忙しいため、滅多に二人には会わない。親代わりと言つても過言ではなかった。

「父から呼ぶなんて珍しいな。何かあつたのか?」

「でもいいじゃない。お父様に会うのは何カ月ぶりかしら」

カレンに付いていきながら二人で話していると侯爵の自室ではなく、応接間に着いた。

コンコン…

「入れ。」

威厳のある声で二人を入れた。

「失礼いたします。」

「失礼します。」

部屋の中には、ステイプ・ダーウィン侯爵がいた。

容貌は、彼女らが前にあった時よりも疲れからか、老いてきている様子が目の皺や綺麗だった銀髪が白くなっていたことから分かるほどだった。

部屋には、他にも貴族にはよくいるような茶髪に碧眼の婦人と大柄の青年もいた。婦人が黒い手袋をはめていなければ、どこにでもいる貴族だ。

「この人達はお前たちの新しい母親になる、シーフと兄になる、ラストだ」

あまりにも唐突だったため、兄妹は驚きを隠しきれなかった。

「父上、アランもウエンディも驚いていてはいりませんか。オレは、ラストだ。今年で十九になる。よろしく」

ラストは、近寄って手を差し出した。

アランは握手を、ウエンディは手の甲にキスを受けた。

ウエンディ自身は、貴族間の挨拶である手の甲へのキスには慣れてきた。しかし、ウエンディはいつもは感じぬ、何かゾツとするものを感じている。

(何なの…この感覚…?)

ふと顔を上げ、シーフとラストを見ると、心というよりも本能に近いものが何かを感じているような気がした。

真っ先に血の気の引いたウエンディに気がついたのは、アランだった。

「ウエンディ、どうした？具合でも悪くなったのか？」

シーフは何事かという様子で、ウエンディに真っ先に近づいてきた。

「大丈夫かしら？先にお部屋に戻られて」

そう言い、ウエンディの肩を触ろうとすると、電気でも流れたかのように手を引っ込めてしまった。

「は、早く彼女をお連れなさいっ」

平静を装って女官に命じていたが、慌てていたのは確かだった。その思いを隠すようにアランに話しかけ始めた。

「アランは今日、誕生日のようね？いくつになられたの？…」

この日から二人の運命の歯車が狂い始めた。

挨拶も終わり、ラスタとシーフの自室にいた。ラスタは自分の剣を磨きながら、ラベンダーのハーブティを飲むシーフと話していた。

「ウエンディ、聞いていたよりも美人さんだったな。アランは剣の腕はありそうだ」

「アランは何でもないでしょう。でもあの娘は…厳しいわ。まだ、本来の力に気付いていないだけ」

「母上、どう意味ですか？あの目的に支障でも？」

ラスタは驚き、剣を磨く手を止めた。

「母親の影響かしら。でも、この地から征服すればあとは簡単よ」

そう、彼女らの目的はダーウィン領の権力を手に入れるのを皮切りに、ガサラ国、そして近隣諸国をも支配しようとしていた。

「そうですね。母上の魔力でダーウィン侯爵も思いのままなのですから」

シーフは《闇の魔女》と呼ばれる、魔術使いであった。

ダーウィン侯爵は、闇魔法の《服従の術》により、シーフの意のままにされていたのだ。

「私たちの世界まであと少し」

シーフには、本物の魔女のような笑みが浮かんでいた。

二章

数日後のこと。シーフ達がやって来たあと、過労の為にダーウィン侯爵は床に就いてしまった。その為、実子である、アランが政をおこなっていた。だがそんな中でもアランは、剣の稽古と学問は欠かさなかった。

アランとラストは剣の稽古をしていた。

「なかなかだな。だが、まだオレには及ばないぜ！」

キーン！

ラストはアランの練習剣を飛ばしてしまった。

「・・・手合わせありがとうございます・・・用を思い出したので失礼します」

そう言い、アランは練習剣を拾って壁にかけると、練習場を立ち去って行った。

『母上の言う通りかもな。アランは何でもない』

そう考え、剣を投げ捨てて小姓に拾わせると、ラストは自室へ戻って行った。

「アラン、手を抜いてきたんでしょ」

練習場の見える、アランの部屋でウエンディは待つていた。

「ああ。それよりお前は調子は戻ったのか？いや、勝手に部屋に入っていることを見ると平気だろうな。また、カレンに怒られるぞ」

「『レディらしくしてください。兄君だからといって、殿方の部屋に忍び込むのは…。貴族の方は、ウエンディ様のお年でしたら、婚約していらつしやるはずですよ？』でしょ？もう聞き流してるから大丈夫っ」

アランは苦笑とも取れる顔で机に座ると、書類へ目を通しだした。

「それって、大丈夫なのか……。？……。それより、なんで紹介の席で顔色悪くなったんだ？それまでは普通だったろ？」

ウエンディは、首を傾げていた。

「私も分かんないのだけど……。《勘》……。っっていうか……。何ていうか……。っ」

「またお得意の勘か。今回はどんな風に感じたんだ？」

ウエンディは、ソファにあつたクッションを抱きしめながら険しい顔をしていた。

「……。嫌な感じ？」

「……。それは分かりやすい評価で……。他には？」

アランは、ウエンディの邪魔な髪を耳にかける仕草に、可愛いと

感じていた。

「何か・・・不吉なことを考えてます・・・って感じ?」

「・・・また分かりやすいな。でも、これは確かだな」

「奴らは、悪意を持って、この城にやってきた」

ウエンディの勘には信頼を寄せていたアランは、書類から目を離し、同じ光を放つ空色の目を見つめていた。

「そうね・・・そうしたら、アランは本気の稽古どうするの? ラスタに手の内がばれてしまったら・・・」

「そうだな。ボルトがいたら良かったのだが・・・アイツヒ平原に夜行くことにするよ」

「乗馬によく行くところね?」

「ああ。それはそうと、ウエンディは大丈夫か? シーフはお前にべつたりな感じがするが」

シーフはウエンディを警戒しているのか、毎日毎日部屋に見舞いに来ていた。

「そうよね。でも、あの時から私に触れようとしてないみたい。何を考えてるのかしら」

二人は窓の向こうの沈みかけた夕陽を眺めながら、何事も起こらないことを祈った。

(あの小娘から気配が無くなっている。今がチャンスかしら)

シーフは、水鏡を前に考えていた。すると、今まで普通の水だったのが、血のような真っ赤になっていった。

コンコン

「どつぞ」

扉を開けると、ダーウインの色である灰色の軍服に身を包む、茶髪の体格のいい男性がいた。ダーウイン領一の隊を持つ、バイン卿だ。

「突然お呼びして申し訳ありません。まあ、そちらにお掛けになって」

シーフは、自身でお茶の用意をしていた。

待つてる間、バイン卿は考えていた。

（なぜ自分の様なものを自室に入れたのだろう。侯爵には知られたくないことなのか？）

そんな考えを見透かしたようにシーフは話し出した。

「驚かれたでしょう？ 卿にお話があったので来ていただいたの」

お茶をテーブルに置き、向かいの椅子に腰掛けながら話しかけ始めた。

「な、何でしょう?」

食い入るような目に緊張した様子で、お茶に口をつけた。

(そう、飲むのよ・・・)

バイン卿は目がトロンとしてきていた。卿の飲んだものは、意識を薄くする作用があるものだった。

シーフは、バイン卿の耳元で囁いた。

「《トウドウスドゥール》・・・」

その呪文は、《服従の術》だった。禍々しいばかりのビリジアン色を宿した目は、シーフしか見ていなかった。

「・・・何でしょうか、シーフ様?」

水鏡の水を小瓶に入れると、バイン卿に差し出した。

「侯爵の水差しにこの魔法液を入れてきなさい。寿命を極度に減らす物よ。行きなさい」

「はい、シーフ様・・・」

バイン卿は、世界の絶対的王からこの上ない名誉を貰うかのよう
に受け取った。

本来の卿なら、一度忠誠を誓った侯爵への反逆は絶対にやらない。
だが、自分の意思を無くされた今は、どうすることも出来なかった。

二章（後書き）

文の構成やおかしな表現があれば、ぜひ指摘してください。もちろん、励ましなどもお願いします。次話もお楽しみに・・・

三章

ダーウィン城の城下は、ガサラの中では賑やかな方では無かった。だが、店々はそれぞれの商品などを売ろうと威勢のいい声で賑わっていた。

「おばさあん！これくださいっ」

木綿の服を着て、フードは被った明るい青空の色の目の少女が薄紫色のナデシコを指して、澄んだ声で呼び掛けた。

「あら、ウィンディちゃん。おつかいかい？」

「ううん。お父様のお見舞いに」

（よし！今日もバレてないっ）

そう、城下町では『ウィンディ』と呼ばれる空色の目の少女は、ウエンディだった。

幼い頃から、城を抜け出して、城下町で遊んだり、買い物をしてきた。

「えらいねえ、ウィンディちゃん。親父さんにこれ持っていきな？」

花屋の隣の果物屋のおじさんは、青色の林檎を差し出した。

「ありがと！お金・・・」

「いいってことよ！おじさんからの贈り物ってことで」

目皺が深く浮かぶほど優しく微笑むと、ウエンディの手を掴み、

青色の果実を握らせた。

「でも……」

「もらっとけよ、ウインディ。『ドケチ狸』にただで貰えるなんてことは、そうそう無いぞ？」

向かい側の八百屋の主人は、自分の客におつりを渡しながら、話に加わってきた。

「『ドケチ狸』だつて？ウインディちゃんは可愛いからいいんだよ！」

「『ドケチ狸』の次は、『スケベ狸』か？」

二人の主人が言い争っている隙に、花屋にお金を払った。ウインディは、不安げな顔で言い争いを見つめていた。

「おばさん……おじさん達、止めなくていいの？」

「ええ、大丈夫よ。事あるごとに起こってるから」

「そお？じゃあ……私は帰るね」

お互いの頬を引つ張り始めていた二人は、その言葉に勢いよくウインディの方を振り返った。

「帰るのか？」

「うん。あんまり出かけてると、心配するから。おじさん達、怪我しないでね？じゃあ！」

花を抱えながら、林檎を握りしめて走っていく彼女の姿は、風のようにだった。

「なあ……あの娘ってさ、領主様のお嬢様の『ウエンディ様』だよな？」

八百屋の主人は、呟いていた。

「そっだよな。俺らの身近にまで来てくれて、親身に優しくしてくれる貴族はそうそういない」

城下の人々は、『町娘のウインディ』は『貴族のウエンディ』であることを知っていた。だが、『お忍び』でやってくる、心優しいウエンディに、また来てほしいと思っていた。

城に帰ったウエンディは、着替えてそれまで着ていた木綿の服をクローゼットの奥にしまうと、花と林檎を持ってスティーブの部屋に向かった。

（お父様、元気になればいいな……）

ウエンディは、廊下の角を曲がろうとした。だが、ウエンディよりも大きな男性にぶつかってしまった。

「痛っ」

「気をつけるっ……！んっ？……ウエンディか」

ぶつかったのは、ラストだった。

「あ……ゴメンナサイっ……」

「これからは気をつける」

マントを翻して、行ってしまった。ウェンディはくしゃっとなつた。手元の花を見つめていた。

(ナデシコ・・・つぶれちゃった・・・)

ウェンディは、それだけが悲しかった。

三章（後書き）

ウエンデイが思ったより幼くなったかもしれません……。どんな風にすべきかなどありましたら、よろしく願います。

四章

「若様！姫様！侯爵がつ！」

カレンが大急ぎで二人を呼びに来た。

「どうしたの?!」

「容態が悪化しました！シーフ様やラスト様も呼び、話があるとおしゃっていました」

城主の病状の急変によって、城内は人の往来が激しくなっていた。走り出すほどの勢いで三人は侯爵のもとへ向かった。

「父上」

「お父様」

扉を開けると、侯爵は真っ白な顔になっていた。

「……………アラン……………ウエンディ……………。最後の最後まですまない……………」
「お父様、ど……………」

二人は、何を伝えたかったのか分からず、尋ねようとした。しかし、扉の開く音に遮られた。

ガチャ！

「侯爵」

「父上」

シーフとラストが入ってきた。

ステイブには、もう起き上がれるほど力が無いのに、最後の力を振り絞って起き上がり、言った。

「アラン……ウエンディ……民を頼んだぞ……」

そして、ダーウィン侯爵は目を閉じ、二度と目を開けることはなかった。

「お父様っー！」

葬儀も終わり、喪服を着た、アランとウエンディは悲しみにくれていた。

会うことはあまりなかったが、血の繋がった両親をもうどちらも亡くし、二人きりになってしまった。

ウエンディはソファに座り込み、顔を手で塞ぎこんで泣いていた。嗚咽を聞くのがつらくなったアランは、ウエンディを慰めようと柔らかな金色の髪を優しく撫でていた。それでも止まらない、という

よりもまた新たな涙が流れてきたので、思っていたことを言おうと思っただ。

「……………父上は最後謝ってたな。謝ることなんて何も無いのに」

「ええ……………お父様は……………私達の……………たった一人の……………お父様……………なのだから」

窓の外の打ち付けるような滴を降らす雨空は、彼らの今の心のようだった。

ラストは自身の母親に向かっていらいらした様子を見せていた。

「母上、侯爵は何も言わずに死んだので、ダーウィン領を得ることはできません！」

「得ることなんて簡単よ。あの二人を消せばいいのだから……………
・バイン卿」

魔女にびつたりな笑みを浮かべ、バインを呼んだ。

「はい、何でしょうか、シーフ様」

「明朝。アランとウエンディを殺しなさい」

「はい」

次の朝、バイン卿は隊を連れ、アラン達の部屋へ向かった。そこには、もうアランもウエンディもいなかった。

「気がついたのね。まあいいわ。忌々しいあいつらがいない今、私がダーウィン領の領主よ」

その声と共に雷が轟き、ダーウィン領はシィーフによって暗黒の時代になっていった。

五章

アランとウエンディは西陽をそれぞれの背に浴びながら、馬で山脈を越えた。

「ここが……サファルか……」

アランの呟きで、それまで、泣き疲れと馬に揺られた疲れからアランの背に寄りかかるように顔を埋めていたウエンディは、顔を上げた。

「綺麗……」

二人が見下ろす麦畑は、夕陽に黄金に染め輝き、秋風に穂を揺らしていた。その姿はまるで、サファルの象徴とされる、たてがみを揺らす獅子のようだった。

ふと目をそらそうとすると、涙が流れるあと少しのところまで来ていたことに気がつけた。

(なんで? ほっと……したから?)

感動するほどの景色は、立て続けて起こるこれまでにない不運で緊張したウエンディの心をふつと緩めさせたのだ。

(駄目っ! 泣いちゃ……)

唇を痛いほど噛みしめていた。

(もう、弱くなりたくない………!)

「大人にならなきゃいけない」と感じたウエンディはアランの背から手を離していた。

「………」

驚いたように、それでいて何処か淋しげなアランに、ウエンディは気がついてなかった。

日も沈み、旅館や夜の店の光で町は明るかった。

二人は泊まるための宿を見つけるために町を目指して畑の間を歩いていた。

そんな時、前方から人声が聞こえた。

「マントとフード、しっかり被っとけよ。さすがに庶民が着るものじゃないからな」

城を抜け出す時に着替えてはきたが、旅装束ではないため、ただの旅人という言い訳は出来そうになかった。

アランが、前方を見ていると、二人の盗賊に絡まれている老人がいた。

彼は、馬を止め、腰に剣があることを確かめると、ウエンディを残して馬を降りた。

「ちょっと待ってる」

「えっ………？アラン？」

そう言うと、アランは馬の鼻面を軽く叩き、歩み寄っていた。

「なあ、じいさん。金持つてるんだろお？さっさと出せよ」

脅されているというのに、老人は平然としていた。

「君らに渡すための金など持っておらんぞ？」

「なんだってっ！力づくじゃないと分かんないのか？！」

盗賊の一人は、短刀を振りかざそうとしていた。しかし、降り下ろせなかった。

「んっ！？」

盗賊は、背を振りかえると手を押さえていたのは、アランだった。

「お年寄りには優しくするものですよ」

そう言うと、後ろから襲おうとするもう一人を長い足で蹴り飛ばした。

そして、押さえていた手を捻らせて、短刀を落とす。足を引っかけさせ、倒すと、背に捻り上げた。

「痛たっ、たっ、たっ！」

「………おじいさん、こいつらどうしますか？」

後ろでのびた男と体の下の男を見て、最初に狙われていた老人に尋ねた。

「未遂では終わったが、この先にある町の警備隊に出してもいいと思うの」

「そうですか……あ……」

アランの下にいる盗賊も気絶していた。

アランは、盗賊の上から立ち上がり、膝についた泥を落とすと、縄を探そうと盗賊の荷物を物色していた。

その様子をその場にあった切り株に座りながら老人は、見ていた。

「随分な腕前のようじゃな。何処かの騎士かね？」

アランは、手を止めて言葉を選ぶように答えていた。

「……いえ。妹と旅をしている……放浪の……身です」

「その妹さんは？」

「……忘れてたっ！」

アランが、来た方を振り返ると、ウエンディは馬を歩かせていた。

「アラン！レディは待たせるものじゃないのよっ！」

フードの下からぶつくと頬を膨らませたウエンディは、アランに叫んでいた。

「すまないー！」

アランがウエンディを紹介しようと、老人を見ると懐かしげな表情を浮かばせてウエンディ

を見ていた。

「……………ソフィア……………」

「……………？母ではありませんよ。あれは、私の妹です」

『ソフィア』というのは、アランとウエンディの母親の名前だったため、アランはそう答えたが、老人はその言葉にも驚いていた。

「母……………そうか！君らがソフィアの子どもか！」

感動し始めた老人に兄妹は、首を傾げていた。

五章（後書き）

中途半端なところで切ってしまってますみません。不定期になってすみません。謝ることいっぱいですみません！！

次回も頑張りますので、応援コメント・批評のコメントもよろしく
お願いします。

六章

町の宿屋からは、すでに町の人が飲んでいるのか、楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

馬を馬小屋に入れると、老人は扉を開け、ウエンディ達を通してくれた。

「奥さん、部屋は空いているかい？」

老人が宿の中に声をかけた。

「あら、アレニウス様。いらつしやい。どうぞ入って」

明るい女の人の声が、出迎えた。

店の中は、一階が飲み屋になっているらしかった。

「女将さん、どこか個室で食べられる所はないかね？」

「ああ、それなら奥の部屋にどうぞ。食事は、いつものでいいですね？」

女将さんと呼ばれた女性は、真ん中の大きなテーブルで飲んでいた男の皿を片付けながら、老人、アレニウスと話していた。

「ああ。あとパンとスープも足してくれ。さあ、二人とも行くぞ」とりあえず二人は、小柄な老人についていくことにした。

席に着くと、ブランデーや香草焼き、アレニウスが頼んだパン、イモなどのスープが出てきた。

「美味しそう……」

ウエンディは、目の前から漂う美味しそうな匂いに呟いていた。

「遠慮せずに食べてよいぞ、ダーウィン兄妹？」

ダーウィン兄妹は、驚いたようにアレニウスの顔を見ていた。

「わしは、君らの両親をよく知っているのだよ。特に母親は……」

どこか懐かしげな表情がまた浮かんでいた。

「……アレニウス殿のお話をお聞きたいのですが……
先に私達の話の方がよろしいですか？」

ウエンディは、隣で背筋を伸ばして口を開いたアランに驚いた。どこか父親に似た威厳のある姿勢から驚いたのかもしれない。

「ああ、君らの話をまず聞いてもよいかな？」

アランがこれまでの経緯を話し、それにウエンディが付け足す形で話し始めた。

一通り話し終わると、ゴブレットに入ったブランデーを飲み干したアレニウスは、沈んでいた。

「そうか……ソフィアもステイブももう死んでいたのか……そして、あやつも……」

ウエンディは、パンを食べようと上げた手を止め、ふと尋ねた。

「なぜアレニウスさんは両親を知っているのですか？」

「ソフィアは、私の弟子だった」

ウエンディの金の髪を見つめながら、アレニウスは言った。

「えっ……何の……弟子だったのですか？」

「聞いていないのか？君らの母、ソフィアは金の風魔女と呼ばれる魔術使だったのだよ」

「えっ……」

「『《魔術》……？』」

二人は《魔術》という言葉に驚いていた。

「ステイバは何も話さなかったのだな。ガサラは、サファルほど魔術技術が発達しておらぬしの」

アレニウスは、瓶からゴブレットにブランデーを注いでいた。

「神学の博士から少し聞いたことがありますか……現実にあるものだとは……」

「そうすると、アスタリさんも魔術使いなのですか？」

複雑な表情のアランとは逆に、興味が湧いたウエンディは、空色の目を輝かせていた。

「ああ、サファル国立魔術団の団長だ」

「だ、団長さん……ですか……」

優しいな老人の予想外な立場に驚いていた。

「そうだ！君たちはその継母達を倒さなければならぬのだな。だったら、アラン、君は王都へ向かってみてはどうだろう。しばらくすると、武術大会が開かれる。国王は公正だ。だから、どんな身分でも使ってくれるはずじゃ」

「ウエンディはどうするべきだとお考えですか？」

アランは、自身の返事よりも先に妹のことを尋ねていた。

「ウエンディは……魔術団に入るのはどうだろう？魔術使の血は娘に多く流れるという話もある。だから、サファル三大魔術使いとも呼ばれたソフィアの娘なら、きっと使えるはずじゃ」

「……」

アランは口を閉ざしたままだったが、ウエンディは口を開いた。

「私は……行くわ」

ウエンディは決意した。

「……アラン、君はどうするんだ？」

アランは考えていた。

（ウエンディと離れることになるのは寂し……っじゃない！離れることで危険が増える可能性は……だが……）

決意したようだった。

「ああ、そうしよう」

「だが、ガサラ国出身だということは言わない方がいいと思う。これからの情勢どうなるか分からないから」

アランは険しい顔でウエンディに言った。

「ええ、分かったわ」

「それでは、明日出発しよう」

話も一段落したので、アランも食事を始めた。

「そういえば、君らは服の予備は持っているのかね？」

「いえ……あ……！」

雨に濡れて、生乾きのままだったことに気がついた。

「女将さんにもらって、熱い湯を浴びて寝なさい」

「クシユンツ！」

返事のように同時にくしゃみが出た。アレニウスは、その様子を孫を見るような優しい目で見ていた。

六章（後書き）

更新遅れてすみませんm（）——（）mコメントもぜひよろしくお願
い
しますっ！

七章

翌朝。アランとアレニウスは旅支度を終えて、ウエンデイの部屋の前にいた。

「……………遅いですね、ウエンデイ……………」

「……………支度に手間取っておるのかの？」

「……………ちよつと呼んでみますか？」

アランは、女将さんから朝食分としてもらっていたのパンのお弁当を左手に持ったまま、部屋の薄い戸を叩いた。

コンコン……………

「ウエンデイ？終わつたかい？」

「……………」

部屋の中からは、ガサゴソと物音はするのだが、ウエンデイの返事は聞こえなかった。その反応にアランはブツブツと考え込み始めた。

「……………何で返事がないんだ？……………物音はあるから、いるのは確かだ……………も、もしもだが、ウエンデイの口が塞がった状態で、物音はすると……………ま、まさか!？」

焦った顔でアランは、戸を壊すのではないかと思うほど叩いた。

ゴンゴンゴンゴンゴン……………!

「ウエンデイ！出てきなさいっ！そこにいるのは分かっているっ！お兄ちゃんが中に入って助け……………んぐっ！」

ものすごい勢いで焦り始めたアランは、突然開いた扉に打ちのめされた。

「うるさいよ、アラン。近所迷惑、近所迷惑。ただ口にリボンをく

わえながら、髪結ぶ途中だったただけだし……」

扉から出てきたウエンディは、女将さんからもらった服を着ていた。

蜂蜜色の艶のある髪は、高い位置で一つに黒いリボンで結び、服は、ドレス型で短めの厚手のスカートの下にズボン履き、長い皮のブーツを履いていた。

「……ウエンディ？」

真っ赤な顔をして、鼻を押さえていたアランは、しゃがみこんだままウエンディを見上げていた。

「あ……ちよつと待って……」

ウエンディは、気がついたように再び部屋に入ると、寝具に広がったもらい物の服を袋に文字通り詰め込み、袋を手に持って出てきた。

「用意は良いかな？」

アレニウスは、孫を見るような目つきでアランとウエンディを見ていた。

「あ、お待たせしてすみません。行きましょう」

ぺこりと頭を下げると、ウエンディは進みだした。が、ふと

思い出したようにアランを振り向いた。

「私が髪結んでいた時、何か勘違いしてよね？ だいぶ焦ってたけど……」

ウエンディは、裏のない無邪気な質問をしていた。

逆に、全く別の意味で考えたアランは、顔を赤から青に素早く変え、パンを置いたまま慌てて立ち上がって追いかけた。

「い、いや！ 何でもないっ……」

不思議そうに首を傾げたウエンディの底知れぬ『天然』の加減に銀髪の青年は、嫌な汗をかいていた。

アランが、朝食のパンを置いてきたのに気づくのは、宿を離れてしばらくしてからだった。

八章

ガサラとサファルは、国交を繋げているため、両国の条約の下、商業道路は整備されていた。

その道は、ガサラとサファルのそれぞれの首都を繋ぐ『セントラルライン』と中央道から各町や村、もしくは領へと延びる『フロレンスライン』『地方道』から出来ていた。

国境の境には、一つ一つの道に関所が置かれており、殆んどの商人や旅人はそこを通過して入らなければ、野生動物が多くいる山脈を越えることは不可能とされる。

その『不可能』とされていた山脈を偶然なのか、必然なのか、越えた兄妹とこれもまた、偶然なのか、必然なのか、出会った老人、アレニウスは、サファル国の首都と首都より少し北にある村との分かれ道に来ていた。

「今は、魔術団はグリゴール村にいる。私らは左じゃな」

「私は右ですね」

馬を止め、立ち止まった。

「ここからは別れることになる。馬で行くとなると……そうじゃな……一日、二日で着くはずじゃ。気をつけて」

アランとアレニウスは、握手をすると、アランはウエンディの方を見た。

「……気を……つけてな」

照れくさそうに顔を赤くしながら、聞こえるか聞こえないかぐらいの声でアランは話していた。

「えっ……うん。アランも気をつけてね」

ウエンディは、ついさっきアランとアレニウスがしていた握手をしようと、ウエンディは手を差し出した。

アランは、一瞬驚きながら、ウエンディの柔らかい手を握り返した。

二人の顔には、温かい笑みが浮かんでいた。

そつと手を放すと、アランは再びアレニウスの方に向いた。

「妹をよろしくお願いします」

「ああ。応援しとるぞ」

「ありがとうございます」

そう話すと、アランは、毛並みもきれいになったアランの愛馬にまたがり、振り向かずに進んでいった。

「……私達も進もう」

アレニウスの驢馬を引き、歩み始めた。

「ここがグリゴール村だ」

そこは、前の村とは違う情景だった。

花畑が広がり、花を摘んでいる娘の姿もあった。

「すごい……」

感激しているウエンディにアレニウスが説明していた。

「この村では、花を咲かせ、蜂蜜にしたり、香水にしたりしている村なんだ」

我が事のように話しているアレニウスの顔は晴れ晴れしていた。

「さあ、あと少しで着くぞ」

開けた野原に向かうとそこには、大小色とりどりのテントが立ち並んでいた。

夕日が沈みかけているなか、ここでは、十数人ぐらいの男女が入り交じって、夕食の準備をしていた。

近づいていくと、ウエンディよりは若い小柄の少年がアレニウスの姿を見つけた。

「団長がお帰りになったよー！」

その声変わり途中の独特な声色に、気がついた人達は、仕事の手を止め、集まって来て、二人を歓迎していた。

準備も終わり、夕食のテーブルを囲んだ席でウエンディは紹介された。

「新しく加わることになった、ウエンディだ」

アレニウスに促され、慌てて立ち上がった。

「これからお世話になります、ウエンディです。よろしく願います！」

周りから温かな拍手を浴び、ウエンディの心は熱くなっていた。

夕食も半ばに入り、酒の入ってきた人達は騒ぎだしていた。

その姿をボーツと見ていると、いきなりウエンディの肩に手がいきなり回され、話しかけられた。

「よっ！俺はグリーン。フィレンステッド・グリーンだ。よろしくな」

「よ、よろしくおねがいます」

色気全開なのか、ただ酔っ払っただけなのか、上着の前を大きく開き、シャツも最低限ほどしかボタンを留めていない大柄な赤髪の男性が、ワインを持って、隣に座ってきた。

「そんなに固くなるなんて。おい、ジョージア！こっち来いよ」

一人で食事を摂っている女性をグリーンは呼んだ。

彼女はグリンの隣にいる、ウエンディに興味を持ったのか、二人の前の席に座った。

「彼女はジョージアだ」

「ラビー国出身のジョージア・トリンだ。よろしく」

少し黒く焼けた肌の鶯色の目を持つ女性で、真っ赤な赤髪をポニテールにして、男物の服を着ていた。服は男物だったが、スタイルがよく、きれいな顔立ちをしていた。

ラビー国は、サファル国に隣り合っている温暖な小国だった。

「ウエンディはどこからきたんだ？」

ジョージアはウエンディに尋ねた。

「えっと……」

ウエンディは、アランに「ガサラ出身ということは言わない方が

良い』と言われたことを思い出し、口を噤んだ。不審に思われてしまふと思った。しかし

「俺はサファル国出身だぜ」

グリーンは酔っていて、ジョージアの質問に答えていた。

「テッドには聞いていないぞ！」

ジョージアはグリーンをキツと睨んだ。

「怒った顔もかわいいぜ」

「セバスチャン！この酔っ払いを連れてってくれ！」

ウォンは近くで給仕をしていた、コックの姿の少年を呼んだ。

「はいはい！」

その少年は、最初にアレニウスを見つけた変声期途中の少年だった。

「ウエンディさんでしたっけ？セバスチャンです。よろしくお願ひしまーす」

そういい、自分よりも大きなグリーンを慣れた様子で担いでいった。
「……………すごい」

「いつものことだ。ウエンディも明日は早い。そろそろ寝に行くか？」

「はい」

ウエンディはジョージアについていき、小さなテントに入った。

そこには、小さいながらもベッドや机などがあり、きれいに完備されていた。

「私と同じ部屋だから、そっちのベッドを使うといい。じゃあ、おやすみ」

そう案内すると、広場へ戻っていった。

「おやすみなさい……」

ウエンディはベッドに入った後も寝られずにいた。

『アランは無事に着くかな？この人たちはいい人そうだけど、さつきみたいにガサラのことを聞かれたらどうしよう……………』

『それよりも問題は、ま、《魔術》って何だろう……………』

そこまで考えたところで旅の疲れで眠ってしまった。

八章（後書き）

正直に告白します・・・サボっていましたm（| |）m反省します・・・というところですが、次もまた更新遅れてしまうかもしれません。本当に不定期になってしまいました。これからもよろしく願います。

九章

真夜中、団長の久しぶりの帰りで騒がしかった宴会調子の夕食も終わって、広場は静まっていた。

そんな中、ウエンデイは、一人目が覚めていた。

驚沢を言えないのは分かっていたが、しかし

(身体中が痛い……)

今まで生きてきた中で、普通の庶民の寝具で寝たことの無かったウエンデイにとって、木で作られた簡素なベッドでの二晩目は体が堪えていた。

カーテン越しで静かに寝るジョージアを起こさぬように、ウエンデイは、軽い上着を着て、黒いリボンで緩く髪を束ね、そっとテントから抜け出した。

夜は、空気が澄んでいた。

星は、輝いていた。

「あ。あの星座は……大鷹座……」

ウエンデイは、草原に寝転び、空を見上げた。

ふと、ダーウィンでのある夜の事が思い出された。

その夜も空気の澄んだ夜だった。

ウエンデイが、十二歳、アランが十三歳の時だった。

アランは、その年の春にガサラの成人年齢である十三歳の成人の儀を終えていた。

ガサラの貴族の教育として、武術や作法の指導・教育担当の教授、指導係を成人(十三歳)以前に付けるようになっていた。

ダーウィンに来た指導係の中で、彼らに年齢が近かったのは、十七歳のポルト・ストラトスだった。彼は、ガサラでは珍しいくすんだ色の茶髪で、伸ばしたままの髪は紐で緩く束ねていたが、結びき

れない後れ毛はいつも残っていた。だらしない印象はあるが、十七歳の若さで剣の師をしているだけに、動きには無駄がなく、鶯色の瞳の奥に見る者に威圧を与える光を持っていた。

真夜中、兄妹とボルトは城の北の塔で寝転び、夜空を見上げていた。

「あの青く輝いている星は、人に意思を伝えるのが好きと言われる^{アスライト}藍銅鉱座。あつちの唯一桃色に光る星は、さまざまな神を魅了したと言われる^{ローズクォーツ}紅水晶座だろ……」

ボルトは、二人に星を指して教えていた。

「ねえ、ボルト。星座の名前って宝石の名前が使われてるのが多いよね。何で？」

ボルトの左で寝転んでいたウエンディは、首を向けて尋ねた。

「神学で習ったろ？天上界に住む^{アンビジュ}宝石神が、昼間は宝石、夜には星という形で人を見守り、管理しているんだよ」

「それは分かってるけど……」
「ボルト。ウエンディが言いたいのは、その理由だよ。何でも興味がある年頃なんだ」

何故か嬉しげに話すアランを明らかに呆れた様子で、ボルトは、右を向いてばやいていた。

「おい……その年頃は、もつと前だぞ……と言うよりもお前は妹を甘やかしすぎじゃ……」

「ボルト、そうじゃなくってね……動物とか道具の名前はあまり聞かないなあって……」

ウエンディは、アランの反応はなかったことに流し、前髪を触りながら遮った。

「ああ、それか。あると言えばあるぞ……例えば……
……そうだな……そう！あれだ。周辺各国の国獣だな」

ボルトは、胸元にしまっていた分厚い本を出すと、空と照らし合わせていた。

「あれがこう繋がって……ガサラの国獣の大鷹で、その右

側が……こう繋げて、獅子だろ……」

「向かい合わせなんだ……やっぱり……今、仲悪いのに……」

どこか寂しげに呟くウエンディは、本当に悲しそうなのを兄と兄のような指導係は、感じていた。

「そうだな。仲良くなればいいのにな」

「ああ。そうだな」

「……」

まだ幼く、力がない彼らには、希望しか言えず、どうすることも出来ない国と国との問題に、それぞれが無力さを感じていた。すると、静けさを保っていた空に、すっと何かが横切った。

「あっ！流れ星だ」

ウエンディは、嬉しそうに歓声をあげた。

「流れ星が通る間に三回願い事すると、叶うらしいぞ」

俗説も知るポルトは、分厚い本をしまいながら、思い出したように話した。

「よし、ウエンディ！探すぞ！」

「うん！」

兄妹は、勢い込んで探したが、その夜は見つけられずに、寝室へ戻った。

「大鷹座と向かい合うのが、獅子座で……青い星がアズライト藍銅鉱座で、唯一桃色に輝くのが、ローズクォーツ紅水晶座……」

ポルトから教えてもらった星座を思い出すように、一人でぶつぶつと唱えるようにしていた。

（そういえば、アランは何を流れ星に頼みたかったんだろ。私は……もう叶えられない望みだったけど……）

ウエンディの当時の願いは、「家族や城のみんなと一緒にいられること」だった。

父親は、首都にすることが多く、食卓を囲むようなことも一緒に

遊んだりすることもめつたに無い。

シーフ達から逃げるため、城を出てきてしまった今、その願いは、望めぬ願いであった。

「あ、流れ星！」

憂鬱に浸り始めたウエンディは、突然流れた星に驚いたが、ボルトから聞いた通りに三回願い事した。

今度の願いは、何年後になって叶っていることも願って……

・

そんなウエンディは、テントから見ると人影にも、その流れ星の正体にも、その時には、何も気づかずに……

九章（後書き）

作者：ものすごいおまたせしました！

アラン：本当だよ。僕の出番がもうなくなるかと心配を・・・

作者：過去のことを入れて、名前だけ出た人も出せました

アラン：・・・っおい！遮るなあー！！

作者：次回も時間かかるかもしれませんが、よろしくお願いします！

アラン：・・・えっ！もう終わり！？

十章

次の日。ウエンデイが目覚めたときには、テントの中にジョージアの姿は無かった。

外からは、テントの隙間から漏れる朝日が感じられ、同時に、賑やかな声が聞こえられた。

「なんか、外が騒がしい感じが……」

着替え終わったウエンデイが、テントの入り口を開けると、そこには、それまでに見たことの無い光景が広がっていた。

あちらこちらで、自然には有り得ないような、緑色の炎を出したり、人の形をした水を動かしたりしていたのだ。

「……な、何これ……」

ウエンデイは、口をぽかんと開きながら、目を見開いてしまうほど、あまりの衝撃に驚きを隠せなかった。

棒立ちになっているウエンデイに様々な怪奇現象　ウエンデイには、そうとしか感じられなかった　を引き起こす団員の間を見回っていた、アレニウスが笑みを浮かべて近づいてきた。

「あの……団長さん……これって一体……」
「？」

「これが、《魔術》じゃよ」
「……」

ガサラでの生活からしてみると、ただの奇術や曲芸にしか見えなかった。しかし、よく見てみると、ダーウィンにまで時々回ってくるような奇術師や曲芸師とは、明らかに異なっていた。今、目の前にいる彼らは、種も仕掛けも無いようなことをしていて、人並み外れたことに近かった。

「……団長さん……私、こんなこと出来ませんよ……」
「？」

「それについては、大丈夫じゃよ。君なら、練習すれば、出来る！」

絶対に！！」

握りこぶしをぎゅっと握り締めた老人の目は、生き活きとした少年の目のようだった。

(なんだか、妙な期待をされているんですけど……)

不安げなウエンデイには、気づかなかったのか、無視したのか、気づかれないまま教師役をしているという人のいる、一番か二番を争うような大きさのテントへとアレニウスに連れてこられたが、ウエンデイは気持ちに乗らず、足取りはなぜか重かった。

「……ということで、ヴィドールは、サファルとガサラによって治められています……。寝るな、新入り」

淡々と教科書らしき本を読んで歩き回る教師は、本で顔を隠しながら寝ていたウエンデイが、かくんと頬杖から落ちたところを、本の角で叩いた。

「いったあーっ……！」

「ハハハハ……！」

痛がる様子を、日常茶飯事のお楽しみ、といった様子で笑ったのは、周りの生徒だった。生徒、といってもウエンデイより七、八歳は年下の子供たちだった。

(う、うーっ……！くそおおおっ……！)

ウエンデイは、今まで年下と関わるのがあまりなく、周りがある一人以外は、年下で接し方も分からず、これまでしたこと無かった反応をしてしまい、ウエンデイの顔は、真っ赤になっていた。

こんなことになってしまつのを説明するには、少し前のこと。

「ウエンデイ、彼が世界史をはじめ、基礎的魔術を教える魔法団唯一の教師役、フリッツだ。フリッツ、彼女は少し他の団員とは違う複雑な事情があるから、お手柔らかに頼むよ」

テントに入ると、アレニウスは、一番前の教卓で本を読みふけている男を捕まえ、紹介していた。

フリッツと呼ばれた男は、教師をしているには、二十代後半ほどの若さだった。

端正な顔立ちで、色味の少ない銀色の髪と目をしていた。切れ長の目は、伶俐^{れいり}で、冷たい印象を与えるようで、ウエンディには、やや怖く感じた。

「よ、よろしくお願いします・・・」

おどおどしているウエンディを見定めるようにじっと食い入るように見つめた。

(うぐっ・・・)

明らかに怯んでいるウエンディの様子を見ると、満足気に鼻を鳴らすと、ウエンディにとって重大なことになってしまっただろうことを言い渡した。

「とことんしごいていくから、そのつもりで！」

(・・・はあっ?!)

アレニウスの言った『お手柔らかに』を無視した宣戦布告だった。

十章（後書き）

アラン：なあ……僕の出番無かったんですけど……

作者：あつ……気にしないで（笑）それより、妹さん大丈夫かなあ……。

アラン：そうだよ！！ウエンディ、なんか可哀想なことにい……

！！

作者：さあ、どうなるんでしょう？！お楽しみにっ……

アラン：ウエンディー！お兄ちゃんは、応援してるよおー！！

十一章

(ダメだ……もう習ってるから、つまらなくて眠気が……)

「……ふあ……」

ウェンディは、教科書で顔を隠しながら、欠伸をしてしまった。

「欠伸をした新入り。復習だ。サファルとガサラの国境にまたがる商業道路を二つ答える」

フリッツは、すでにすぐ横まで来ていた。

(いつの間に……)

「えーっと、セントラルラインプロモンスライン中央道と地方道です」

フリッツは、聞いていなかったと思っていた生徒が、答えられることに一瞬驚いて目を見開いたが、すぐに無表情に戻した。

「……セントラルラインプロモンスライン中央道と地方道は、サファルとガサラのを合計で何本あるとされている？」

「えっと、今現在は、何本かは数えきれませんが、二百は越えていると言われます」

二度目も答えられたことは、初めてだったため、驚きと苛つきが、顔に出始めていた。

「……大陸の南には、海が広がっているが、東側、西側、北側には、何がある？」

「東側には、ギーゼ砂漠。西側には、ナラブ荒野・北側には、ムツヒツ森林が広がっています。因みに、ちな南にある海は、ヤバル海です」

答えられる問題ばかりで、ホツとしながら答えているウェンディに、教師の意地なのか、ただの八つ当たりなのか、どんどん問題を出していた。

「第一次東西戦争の時の両国の王を答える」

「ガサラ国はドネーゼ王、サファル国はクアンツエ王です」

「停戦時に記された条約の名前は…」

こんな調子が、様子を見に来たアレニウスが来るまで続いていた。その時、ようやく退屈なあまり、他の生徒が、ほとんど寝てしまっていたことに気がついたのであった。

休憩となった為、テントの中には、アレニウスとフリッツだけになっていた。

「団長。彼女は何者ですか？今日教えていなかった問題すら解けているし、庶民の初等教育的なものよりも何倍も知識を持っています」

「やはり教育については、されていたのかの……。フリッツ、あの子には、魔術の知識しか教えることがないかもしれぬぞ」

「……と、おっしゃいますと？」

「諸事情で、普通科目は分かっている。だから、彼女には、魔術を教えることに重点を置くの良いと思うのお」

「……分かりました。明日から、普通科目は休ませて、魔術は、補習付きでやらせます」

淡々と答えたフリッツは、ウエンディについて少し興味が湧いてきたようだった。

「……疲れた」

ウエンディは、級友が子供らしく外で遊び回ってる様子を見ながら、草原に座っていた。

「ウエンディおねえちゃん！一緒に遊ぼう」

ふと横を見ると、女の子が太陽のような無邪気な笑顔で、遊びにさそってきた。

「ええーと……」

「お姉さんは、お疲れみたいだから、遊んでおいで」

返答に困っていたウエンディの言葉を若い男の声が繋いだ。

「……え？」

声のあった方、女の子の反対側を見ると、少し茶色の入った黒髪の年齢としてはウエンディより一、二歳若いぐらいの眼鏡をかけた男が、女の子に微笑んでいた。

「分かった、アレックスおにいちゃん」

女の子は、手を振って子供たちの輪に戻っていった。

アレックスと呼ばれた男は、女の子が見えなくなるまで笑顔で手を振り返すと、そのままウエンディを振り向かずに立ち去ろうとしていた。

その反応にウエンディは、驚いた。

「ちよ、ちよつと待って！」

ウエンディの声に止められた若い男は、先ほどまでの女の子に向けた笑顔は全くなく、眼鏡の下の黒い目は、不機嫌さをかもしだしていた。

「・・・何か？」

棘のある冷めた言い方に戸惑ってしまったが、ウエンディは、言うべきことは言わなきゃと思い、口を開いた。

「さっきは、ありがとうござ・・・」

感謝の言葉を言おうとしたら、遮られた。

「別にキミを助けたわけじゃないから」

「へっ・・・？」

「ボクは、ただあの子に教えてあげただ。その何が悪い」

ウエンディは、上から目線の噛みつくような態度に戸惑っていた。

「ボクは、君が一番年上だってことは認めないからなっ！！」

「・・・はあっ?!」

本日二回目の宣戦布告だった。

十一章（後書き）

作者：今回は、いろいろ大変だったね、ウエンディ。

ウエンディ：ええ、そうなの・・・ってここ何？・・・えっ？後書き？ああ・・・いつもアランが、やってるところね。

作者：ウエンディ大好き（シスコン）なお兄ちゃんは、置いて・・・。何だかんだ、NEWキャラから、ライバル視されてますが、ガンバツテクダサイ

ウエンディ：は、はあ・・・。あ、みなさん。感想お待ちしてます。

十二章

「ボクは、君が一番年上だってことは認めないからなっ!!」

「……はあっ?!」

本日二回目の宣戦布告だった。

「……何だか、とつても疲れました……」

夕食時、夕食をのせた盆を持ったウエンディは、ジョージアの向かいに座ると、肩をガクンと落として、ぼやいていた。

「おいおい、何あつたんだよ?」

ジョージアの隣に座っていたグリーンは、机に突っ伏し始めたウエンディを見て、苦笑していた。

「フリッツさんには、しごかれたみたいな感じだし……まあ、明日からは魔術だけらしいんですけど、アレックスって子にはなんかよく分からない理由でライバル宣言されたりしてー」

「フリッツは、いつもあだからなあ……」

フリッツの授業を受けたことがないグリーンでさえも、普段の様子から授業での様子を思い描けた。

「だが、アレックスと関わりが持てるなんて珍しいな」

ジョージアは、夕食のパンをちぎりながら、驚いたようだった。
「珍しいって?」

ウエンディが、不思議そうに眉を寄せると、パンを口に詰め込んだグリーンは、説明した……否、しようとした。

「はいふは、ふあん、ひんへんふんふんふんはあ……(あいつは、普段、人間不振ぶるから……)」

バシッ！

言葉の途中で、ジョージアの手が、グリンの後頭部を勢いよく叩いていた。

「はひふうはお（何すんだよ）」

グリンは、頭を押さえながら、ジョージアに抗議していた。

「行儀が悪い！飲み込んでからにしろ」

グリンは、そう言われると、おとなしくブランデーで流し込んだ。

「うん．．．っと。だから、あいつは、人間不振で年上や同世代には、交流を計らないから、そういう意味でだよ」

「そうなんだ．．．てつきり本当に．．．」

ウエンデイは、言葉を切った。

アレックスが、近づいてきたからだ。

アレックスの顔は、遠目から見ても、体も顔も強ばった様子が見てとれた。

近づいてくると、ウエンデイに目を向けずに、ジョージアに話しかけ始めた。

「え．．．っと。ジョージアさん．．．団長が呼んでいました．．．」

そう伝え終わると、勢いよく回れ右をして、もといた方向へ帰ってしまった。

「．．．ほら。早かったら．．．」

「．．．ええ。そうですね．．．」

ウエンデイもグリンもパンをかじりながら、アレックスの後ろ姿を見ている。

「じゃあ、私は呼ばれているみたいだから、失礼する」

食べ終わった食器を載せた盆をグリンの方へ、ジョージアは押しやると、席を離れた。

ジョージアが、遠く離れていった時。やっとグリンは、口を開い

た。

「・・・なあ、ウエンディ」

「何でしょう？」

スープを飲むウエンディに話しかけるグリーンは、複雑な顔だった。

「これってさあ。俺に片づけろって意味だよな・・・？」

「・・・そうだと思います」

「・・・その為だったのか。俺の隣に座ったのは・・・」

グリーンは、がっくりとした様子だった。

十二章（後書き）

作者：今回は、グリーンさんが・・・あれ？だいぶショックを受けてますね

グリーン：・・・はあ。気にしないでくれ・・・。そうなんだよな・・・
・ジョージアが・・・

作者：だいぶショックを受けていますね。まあ、次回もお楽しみに

グリーン：ああ・・・お楽しみに・・・はあ・・・。

十三章

みんなが寝静まった頃。ジョージアは、アレニウスのもとから自身のテントに帰ってきた。

寝ているウエンディを気遣い、静かに小さな書き物机に座り、ランプに火を灯した。

ジョージアが、魔術団に入団してから綴り続けている日記をつけながら、夜を過ごしていた。

静かな夜だった。

だが、ジョージアのランプの他に、誰にも気づかれずに彼女らのテントで光を放つ物があった。

それは、ウエンディの寝間着の下の胸元から光っていた。

星の瞬きのように静かにゆっくりと

「・・・でね。ことりさんとおはなししてたら、にじが出てきて、きれいだったのお」

「へ、へえ・・・」

普通科目には、来なくていいと言われていたので、世界史やら算数やらが終わった頃を見計らって、教室代わりになっていたテントに入ろうとすると、ちょうど休憩時間にぶつかってしまい、年下の女の子達に捕まっていた。

「お、お姉さん、ちょっとフリッツさんに挨拶しないと・・・」

「あのね、ウエンディおねえちゃんが来てることをミーナちゃんとアンちゃんに教えに行ったから、待っててね」

「・・・」

空色の目を灰色に曇らせて、強ばった笑顔のウエンディは、囲まれている状態から、逃げる事ができずにいた。

「えーとっ・・・」

「おい。新入り何してる」

(きゅ、救世主っ！)

ウエンディの背後から、声があり、助かったと思った。しかし、誰なのか気になって振り向くと、ウエンディはなんとも言えぬ表情になった。声の主は、無表情の　否、不機嫌に近いような顔をしたフリッツだった。

「あ、フリッツさ……はへえっ！」

フリッツは、ずっと女の子の輪の中心にいたウエンディに近寄ると、襟首を掴み、引きづるように何処かへ連れていった。

連れていかれたのは、石造りの小屋だった。

「初めは、ここで>魔術<を教える。お前の場合、基礎からだからな」

そういうと、机の上に蝋燭を二本立てて、椅子に座らされた。

「これは一体……？」

「>魔術<の基本、>着火の術<。蝋燭に火を灯すところからだ。では、手本を見せる」

フリッツが、蝋燭に手をかざして呪文を唱えた。

「フレイム」

小さな炎を出し、徐々に銀色の炎に大きくした。

「うわあっ……！」

ウエンディは間近で>魔術<を見られて喜んだ。

「……そんなに喜ぶことなのか……？……まあいい。次は、お前の番だ。まあ、出来ないだろうが……」

ウエンディは、フリッツの呟きを耳にも入れず、フリッツがやっていたように蝋燭に手をかざした。

(集中う、集中う……)

「……フレイムっ！」

張り切って大きな声で叫ぶと、青い炎が普通の倍以上の大きさにまで、勢いよく燃え上がった。

(凄い……出来た！)

しかし、あまりにも大きすぎてウエンディ自身の手にまで炎が当たってしまった。

「あちっ！」

集中が切れると、すぐ消えた。

「馬鹿っ！冷やしてきなさい！」

「はいっ！」

ウエンディは、石造りの小屋から勢いよく出ていった。

フリッツは、ウエンディよりも、無表情に保っていた顔の下で、驚いていた。

「最初から炎を出せたのは、自分が教えた中で初めてかもしれない。加減が分かればすぐに出来るようになるだろうが・・・何者だ・・・あいつは・・・」

フリッツの考え事が一つ増えた。

ウエンディは、水で冷やししながら、ため息をついていた。

（あーあ・・・やっぱりうまいかない・・・出来ないんじゃないかな・・・）

「どうした？んっ？火傷したのか？」

グリーンが植物の入った鉢を持って、近づいてきた。

「ちよつと待つてるよ」

持ってきた鉢を置き、戻って行った。

しばらくすると、別の鉢と包帯を持ってきた。

「手え出せ」

「え・・・？」

固まっているウエンディの手を無理やり取ると、持ってきた植物を使い始めた。

「この植物は火傷にとても効くんだ」

そう言い、真っ赤になった手に塗り、包帯で縛った。

「ありがとうございます・・・」

「敬語じゃなくていいぞ。くすぐりたいからな」

白い歯を見せてグリーンは笑いかけた。

そして、ウエンディの隣に座った。

「俺な。小さい頃、村で>魔術くを使つてたら、不気味がられて。友達が、全然いなくなつたんだ。その中から救つてくれたのが、アレニウスのじいさんだつたんだよ」

「へえ・・・」

ウエンディが、団員の過去を聞いたことは、初めてだったため、そんな過去を持つていたことに驚いていた。

「だからこうやって《魔術》覚えたり、人のためになるようなことしてるんだ」

真面目くさつた顔で話したあと、少し顔を赤くして、はにかんだ笑顔になつた。

「何を俺、話してるんだろ。」

自分の頭をくしゃくしゃつと頭を掻き、持ってきた鉢を持って立ち上がった。

「じゃあ頑張れよ」

グリーンは、ウエンディの頭をポンポンと叩くと、もといた方向へ帰っていった。

ウエンディも、グリーンと話して元気が出たのか、もう一度小屋に行き、くたくたになるまで、《魔術》の練習をした。

その日は、倒れるように寝てしまったのは、言うまでもなかった。

ウエンディは、霧がかかった草原にいた。

(「じい・・・どこ・・・」)

ウエンディが、周囲を見渡すと、どこか見覚えがあつたが、そこ

がどこなのかは、分からない。

だが、うつすらと霧の中に、誰かの姿があった。

(だれ・・・！)

ウエンディが、叫ぶと、何か聞こえる気がするが、聞き取ることが出来なかった。

人の影が消えかけ始めた。

(待って！誰なのっ？)

追いかけてようと走っても、追いつくことができない。

やっと声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。

ウエンディ！ウエンディ！

誰かに肩を揺らされていた。

「・・・デイ、大丈夫か？」

目の前、言葉を変えれば、寝ているウエンディの上の方に、ランプを掲げたジョージアがいた。

「・・・ジョージアさん・・・？」

「ああ。だいぶうなされてたぞ・・・起きれるか？」

「・・・うなされて・・・」

ジョージアは、ウエンディをベッドに座らせ、ランプを机に置き、自分の部屋に何かを取りに行ったようだ。

(あの《夢》・・・何だったんだろう・・・)

昔からウエンディは《勘》が、良かったこともあり、何かと《夢》に表れていたことが多かった。

(・・・前にもこんなこと・・・あったのかなあ・・・?)

あの《夢》で見た草原に、記憶があったことが引っ掛かっていた。そう考えていると、ジョージアは、仕切りのカーテンから、カップを両手持って戻ってきた。

「だいぶ落ち着いたか。今日は、いきなり《魔術》を使って疲れたのかもな。これ、飲めるか？」

「あ、うん・・・」

空色のカップを渡されると、ほのかに花の香りがした。

「いい香り・・・」

「ラビー国の特産のハイビスカスの紅茶だ」

「へえ・・・」

カップを両手に包み、少し、ふうっ、と冷まして飲んだ。

「・・・優しい味・・・」

ジョージアは、ウエンディの咳きが入ったのか、机に浅く座って自分の赤いカップを見つめて飲んでいた顔を上げて、鳶色の目に優しい感情を浮かべた。

「私の親はな。恐い夢とかを見た時とか、悲しいことがあった時に飲むと良いと言ってたんだ」

いつも気の強い表情しか見せないジョージアの優しい表情に、ウエンディは、驚きと共に乳母のカレンに寄せていたような安心感を感じていた。

十三章（後書き）

作者：・・・はい。やっと更新です・・・

フリッツ：遅いぞ、作者。新入り以上に手際が悪い。

作者：うっ・・・。（この毒舌家が・・・）

フリッツ：なんか言ったか？

作者：いえっ、何もおおお！（汗）

フリッツ：それよりも、あの新入りは何者だ？不思議すぎて夜も眠れん。

作者：は、はあ・・・そうですか。（それって、もしや・・・）

フリッツ：うっーん。さっぱり分らん。とりあえず次回もお楽しみに。

十四章

魔術指導が始まって数日たったある日。ウエンディは、アレニウスに呼び出されていた。

「《魔術》の練習は、順調かね？」

「はい」

どんな用件なのか分からずに、びくびくしながらいたため、少しホツとして答えていた。

「そうか。よかった、よかった」

孫に向けるような微笑を見せていた。

（あ………そういえば………）

ふとウエンディは、近頃思っていた質問を投げかけてみた。

「あの、質問なのですが、《魔術》ってそもそも何なのですか？」

アレニウスの顔に驚きが浮かんだ。

「おや？それは、教えられておらなかったのかのお」

「え、ええ」

「フリッツもサファル出身じゃから、《魔術》が知られておるのが、普通じゃと固定観念を持つておるのかの。」

それでは教えよう………《魔術》の歴史を………」

いにしえ
古の時代。

まだ世界に統治者がいない頃。

人は、《魔術》と呼ばれる能力は持っていなかった。

《魔術》が現れたのは、突然だった。

ある日。とある男は荒れ地に小さな木を見つけた。

その男は荒れ地に一本生え出ているのは、愛しく想え、毎日世話をした。

日が明けた頃は、嵐が荒れ狂うときには、倒れぬよう支えていた。

何十年も経った時には、男の膝丈ほどだった木も、身丈をゆうに越えるほどの大きさに育ち、男は老人になっていた。

老人は、病に倒れた。老人が来なくなったことを木は、悲しんだ。

何ヶ月も経ったある日。老人は、木に会いに行った。

死期を悟ったためだった。

老人は、木に言った。

（大きな大木になってくれ。そして、この世界を見守ってくれ）

木は、そのことを約束した。

そして、約束に実をつけた。

その実は、果実ではなく、光り輝く《宝石》だった。

老人は、数日すると、死んだ。

老人の心臓が止まった時。木から《宝石》が飛んでいった。

その《宝石》は、人々に力を与え、人々を守っている。

そして、この木は、大木に育っている。その名を『ジュネール』と言う。

話が終わったとき、ウエンディは、きよとんとしていた。

「・・・・・・・・え？昔話か何かですか？」

「そうじゃ。サファルの子供たちはこう教えられておる。この話は、《魔術》の成り立ちを伝えておるのじゃ」

「・・・・・・・・？」

「《魔術》は、神より与えられし業わざであるってことじゃよ」

「え・・・・・・・・神？」

ウエンディは、首をかくんと傾げた。

「《宝石神》アンビジュは知っておろう。木の実は宝石、つまりは神より与えられし《魔術》であるのじゃ」

「な、なるほど・・・・・・・・」

アレニウスは、ウエンディに背を向け、壁にかかった大きな絵を見つめていた。

「・・・・・・・・団長？・・・・・・・・その絵は？」

「・・・・・・・・ああ。昔・・・・・・・・五十年ほど前の東西戦争のものだ」

その絵は、たくさんの兵が血を流し、あちらこちらから炎や雷が出ている様子が描写されていた。

その戦争は、今世紀史上一番長く、無惨な戦争だった。

そのときには、生まれていないウエンディにまで悲惨さが伝わる絵だった。

(団長さん・・・・・・・・)

アレニウスが、哀しげな表情になっていることは、アレニウスの老

いた背中から感じられた。

「この時の戦争では、たくさんの魔術師が、老若男女関係なく、戦力として徴兵された……。《魔術》を武力として国家に提供させられたのじゃよ」

「ぶ、武力つて……」

ウエンディは、青ざめてしまっていた。

「だから、ワシは戦後にこの魔術団を使い、神より与えられし業^{わざ}を人を傷つけるためでなく、人を助けるために組織されたのだよ」

振り返ったアレニウスの顔には、苦しげで、憎々しげで、哀しげな表情だった。

だが、その表情もウエンディが瞬^{まはた}きをする間に消えて、いつもの優しげな表情に戻っていた。

「《魔術》の細かいことは、フリッツに教えるように言っておこう。夕食を取りに行きなさい」

「は、はい……」

アレニウスのどこか普段とは違う雰囲気^{ふんいき}に戸惑い^{戸惑い}を覚えながら、ウエンディは、首を傾げながら、一礼して部屋を出た。

「母親そっくりだな……」

ウエンディの出で行った扉を見つめると、書き途中だった手紙を書き机に戻った。

十四章（後書き）

作者：今回は、昔話編でしたあ

ウエンディ：ダーウィンでは、伝わってなかった話が聞けて良かったといえばよかったんですけど・・・

作者：・・・ですけど？

ウエンディ：なんだか団長さんの様子が・・・

作者：それについては、後々書けるかな？それでは、次回もお楽しみに・・・

十五章

その日の《魔術》の個人指導は、外での実習だった。

「木の根・蔦を操る時は、こう唱える……」

フリッツは、正面の虚空に手を向けた。

「アイヴィ」

すると、地面から蔦が出てきて、フリッツの手の動きに合わせて網状に組まれていた。

「うわ……すごい！」

年齢に合わないほど、素直に喜ぶウエンディに、フリッツの白銀の瞳に好奇心が浮かんだが、次の行動にはいつもの教師面より激しい色が変わっていた。

「アイヴィ！」

ウエンディは、フリッツを手本にして、籠状のものを作ってしまった。

「おお、出来た」

自分で出来たことに感動したが。

「……まあまあ……ええ……」

ウエンディは、隣に殺気に近い紅蓮の炎が燃えているのが気がついた。怖々振り向くと、銀色の目は、炎とは逆に氷河のように凍っていた。

「……えーどうしたんで……」

「どうしたんですかじゃない。指示してからにしろと言っただろっ
が」

フリッツの眉間には、深い皺をついていた。

ウエンディは、低い声で凄まれて、背中には嫌な汗が伝った。

「は、ハハハ……」

ウエンディは、ゆっくり後退すると、誰かにぶつかった。

「おっと。ダイジヨブか？……フリッツ、ウエンディをあ

んまり苛めんなよ?」

後ろに現れたのは、グリーンだった。

「グリーン先輩……これは、指導です。……で、何のご用ですか?」

フリッツは、今までの怒りは、グリーンが来たことで冷めてしまったようで、無表情に戻っていた。

おお、と思い出したように指を鳴らすと、グリーンは、親猫が子猫の首根っこを掴んでいるように、ウエンディの首根っこを捕まえた。「ちよつとウエンディ借りてくぜ?今の様子だとある程度は出来そうだからな」

「……へっ?」

「先輩、そいつはまだ加減が……」

ウエンディからもフリッツからも返事も聞かずに、ウエンディをズルズルと連れていき、あつという間に遠くまで行ってしまった。

「……先輩め……」

徹底的にしばこうとしたところをちよつと邪魔されて、フリッツは、とても苛立っていた。

その後の授業は、生徒が八つ当たりの対象になったことは、言うまでもなかった。

「どこへ行くんですかあ?」

ウエンディは、途中で合流したセバスチャンとグリーンについていた。

「近くの裏山だよ。そこに薬草になる植物が多く生えてるんだ」

セバスチャンが教えてくれた。

「今までは俺らで行ってたんだが、この間、この時期が旬の薬草が生えてたからお前にも見せてやろうと思ったんだ」

なかば、強引だったのもウエンディに見せたかった親切心から来たことが分かり、ホツとしたと同じに、心配事が一つ出た。

「フリッツさんに後で怒られそうだなあ・・・」
ボソツと言ったウエンディの言葉にグリンは、苦い顔をしていた。
「あー・・・めんどいなあ・・・くどくど煩めんどいなあ」
「弁解手伝ってくださいよ？」
「あ、ああ・・・」
渋々な顔で言った。

十六章

グリーンとセバスチャン・ウエンディとで別れて薬草を摘むことにした。

「こつちのが痛み止め、あそこの黄緑のが麻酔用で……」

セバスチャンは、大きな竹籠を背負ってウエンディに薬草の説明をしていた。

「これが頭痛の時に効く薬。あつちに生えているのが、打ち身に効く薬……」

ウエンディは、セバスチャンに教えてもらいながら、摘んでいた。

「ねえ……何か音聞こえない？」

ウエンディは、鳴き声が聞こえた気がして、セバスチャンに尋ねた。

「……今の時期って熊が出るっていう噂が……」

二人は青ざめた顔で見合わせた。

……ン、ニヤーン、ニヤーン……

「な、なんだ。猫だったの」

「ウエンディさん。僕、腰抜けちゃいましたよ！見てきてくださいよぉー」

「はいはい」

ウエンディは立ち上がって、鳴き声のした方へ向かった。

「ここら辺から聞こえた気がしたんだけどな、おかしいな……」
辺りを見渡したが、猫の姿は無かった。

ニヤーン……

ふと上を見上げると山の岩肌に黒い猫が怯えて動けなくなっていた。

「大変だっ！」

ウエンディは岩肌によじ登っていった。

「ウエンディさん！危ないですよ！」

腰が抜けたのが治ったのか、下にはセバスチャンがいた。

「だ、大丈夫っ！」

下も見ず、黙々と登っていくと、猫の所までたどり着けた。

「はあ、はあ。もう、大丈夫だよ」

猫に手を伸ばして、抱き抱えると、ウエンディの掴んでいた岩が崩れてしまった。

「ウエンディさんっ！」

セバスチャンの叫んでる声が聞こえた。

この猫を助けなくちゃ！

そう思うと、空色の風がウエンディの体を包み、そっと地面に降りた。

(・・・何が起きたの?)

ウエンディ自身も何が起きたのか分からなかった。

セバスチャンは走って近寄ってきて、驚いた顔をしていた。

「ウエンディさん、今の《風》の魔術ですか？」

「今のも《魔術》・・・？」

セバスチャンは、顔が真っ赤になるぐらいとても興奮した様子だった。

「そうです！《風》の魔術は目に見えないものを扱う魔術だから、人を治す以上に難しい魔術だってジョージアさんが前に言っていました。凄いなあ。実際に団長以外で《風魔術》ができる人がいるなんて」

ウエンディはふと前にアスタリが言っていたことを思い出した。

（お母様は、金の風魔女って呼ばれてたって言ってたかな・・・じやあ、セバスチャンのいう通りならば、お母様は、とても強い魔術師なの？）

ニャー！

ウエンデイが考えていると腕の中にいた猫は鳴いていた。

「あつ、ごめんね。怪我でもしてたのかな？」

猫の身体を見回して見たが、特に大きな怪我はなさそうだった。

「お腹減ってるんじゃないんですか？」

セバスチャンの意見に返事でもするかのように、ニャンと答えた。

「じゃあ、帰ろうか」

グリーンとの待ち合わせ場所に足を進めた。

十六章（後書き）

だいぶ更新が遅れました。別の作品でも書いたんですが、テストだったんですよ…。これからがんばりたいです

P・S．今回の後書きは登場人物は出演？しません。楽しみだった人、すみませんm（| |）m

十七章

黒猫にミルクをあげていると、ジョージアがやって来た。

「その猫どうしたんだ？」

「ウエンディが崖の上で怯えていた猫を助けたんだってよ」

草原に横になっていたグリーンは、答えていた。

「ウエンディはその黒猫を飼うのか？」

グリーンはジョージアにそう言われると、困ってしまった。

「考えてなかった・・・」

「ウエンディさんって、さっきといい、今といい、む、無鉄砲なんですね・・・」

ウエンディとセバスチャンは頭を抱えてしまった。

「団長達に言いに行くか？」

ジョージアは思いついたように口を開いた。

「えっ？」

「これから別れるのも苦だろう。だったら早くに団長達に言ってしまった方がいいだろう。私もついていくから」

「ええ。ありがとうございます！」

「構わんよ、その猫を飼っても」

アレニウスは快く了承した。

「ありがとうございます！」

「但し、魔法の勉強を怠ることがないように。フリッツから、報告を受けておるぞ？」

「あー！忘れてたー！！」

ウエンディの叫び声は、響き渡った。

ウエンディとセバスチャン、グリーン、ジョージアは夕食の席で話していた。

「そう、落ち込むなって。俺が次の指導の時ついてってやるから」
「そうですよー。元はと言えば、グリーンさんが何も伝えずに連れてきちゃったんですから」

ガクーンと沈むウエンディをグリーンとセバスチャンは、慰めていた。

「そ、そうだ。あの猫の名前どうするんだ？」

「そうですね・・・あれとかどうですか？ウエンディさんの猫だから、『にやんてい』とか」

「それじゃあ、明らかにゆるい猫だろ。黒猫だから、『ブラック』とかはどうだ？」

男性陣はいろんな名前を考えていた。

「その猫はメスなのか？」

「いいえ、オスみたいです」

ジョージアとウエンディは毛繕いを始めた、猫を見つめながら話していた。

「ん？目の色何か変じゃないか？」

「あ、本当。銀色？え・・・右目は金？！」

ウエンディは驚いてしまった。

「驚いたな・・・暗かったから気づかなかったが、別の色の瞳を持っているなんて。異色の瞳を持つ生き物は何かの使いだと言われるが・・・」

「でも、どんなに変わった猫だとしても、私は責任持って一緒にいます。おいで・・・」

ウエンディが呼ぶと、黒猫はウエンディの腕に抱かれた。

「ジン・・・君の名前はジン。いいかしら？」

黒猫は返事としてニヤン、と答えた。

「・・・三十一個目はマツペ・・・ってもう決まったのか！」

「せっかく考えていたのにー」

グリーンとセバスチャンはガツクリと肩を落としていた。

ジンはウエンディの肩に飛び乗っていった。

「よろしくね、ジン」
猫は微笑み、ニャーンと鳴いた。

十七章（後書き）

グリーン：あー。ウエンディには、悪いことしたな

やっぱり責任感じてたんですか。怖いことは、トラウマになるもんですよ？頑張ってフォローしてあげてくださいね？

グリーン：お、おう。（アンタも何かあったのか）

では、次回もお楽しみに。。。

十八章

(・・・ここは・・・もしかして・・・)

ウェンディは気がつくと、草原にいた。

(・・・あの草原だ)

そう、夢の中で来た霧のかかった草原だった。

ただ、以前と違ったのは、霧が少し薄く、何かが視線の向こうにあつたことだ。

それは、どこかで見ることがあるような桃色の光をしていた。

それに加え、人影が二つ見える。

(だれ・・・?)

頭に響くような、だが、小さくて聞こえぬほどの声が聞こえた。

《・・・を持つ者が貴女あなたに近づいている・・・をつけよ・・・

》

(え、何？聞えな・・・)

光も声も遠ざかっていた。

(待って！待ってよ！)

どんなに手を伸ばしても届かなかった。

顔が何故か濡れた。

・・・ンナー、ンニャー

顔が濡れていたのは、ジンが舐めていたからだだった。

猫の生意気な表情の中に、やけに心配そうな、人間味溢れる異色がウエンディを見つめていた。

「・・・夢・・・だよね・・・」

コクンと黒猫は頷いていた。

起き上がってみると、背中にはジトツと汗をかいていることが分かった。

落ち着こうとジンの首もとを撫でていたが、ふと、聞きそびれた言葉が頭に引つ掛かっていた。

「何が近づいてるんだろ・・・？」

寝ている間、胸元の光が強くなっていたのを知るのは、黒猫だけだった。

「すっかりなついてるな、その猫」

グリーンは、魔術指導を受けるために歩く、ウエンディの方に乗っかっているジンの姿を興味深げに見ていた。

「俺は、よく動物と仲良くなれるんだぜ」

そう言っってグリーンが撫でようとすると、ふいと首を背けてしまった。

「俺にはなついてくれないのか・・・」

動植物とは仲良くなれる自信があっただけにショックを受けていた。

「ま、まあまあ……。あ……。あ……」

フリッツが腕を組み、仁王立ち状態で見えた。

二人はクルツと背を向けてしゃがみこんだ。

「グリーン……。あのオーラ恐いんですけど」

「真っ黒なオーラだな……」

「殺気に近くないですか……?」

「あ、ああ。ヤベエ……。コワッ」

二人は、小声でどうするか考えていた。

「対処法その一。気楽に話しかける」

「絶対ふざけると思われて、殺されますね」

「その二。土下座す……」

「何をしてるんですか、先輩?」

凄むような声が聞こえた。いつの間にか真後ろに立っていた。

「は、ははは……」

ウエンディとグリンの顔は強張っていた。

その後、グリーンもウエンディも数時間説教を受けたことは言うまでもない。

十八章（後書き）

ウエンデイ：変な夢、また見たし、怒られたあ・・・

お、お疲れ様です。で、次回の宣伝？よろしく

ウエンデイ：はあい・・・。えつと？・・・ん？次って出かける？？

・・・はいつ。では、次回もお楽しみに

十九章

魔術団の朝は、早い。

だが、その日は余計に早かった。

「ウエンディ起きなさい。片付けなくちゃいけないでしょ」

「うう……ん。あと少し……」

かかっている毛布を再び上げて二度寝しようとしていた。

だが、さつさと起きろ！と、ガバツと顔に温かい物体がのしかか
った。

「……ふはあっ！息苦しいよー！」

勢いよく起き上がった。

「さつきのはいったい……」

寝台の横を見ると、やや呆れ顔と迷惑顔のジンがいた。

(き、君か……)

文句を言おうと思ったが、早く準備しろよと、睨まれて渋々着替
えを始めた。

「……で、お前は初めてだから、説明するぞ」

着替え中も寝そうになっていたが、ジンに起こされて、やや不機
嫌気味のウエンディは、ジョージアの、机を挟んだ向かい側に座ら
された。

「……はい」

「まず、この魔術団の仕組みは話したか？」

「……いいえ……？」

「この魔術団は、人々から様々な依頼を受けている。まあ、要する
に何でも屋だ」

「な、何でも屋……」

いままでそんな様子は見たことのなかったウエンディには、よく

分からなかった。

「主に家の修理や災害の復興援助とかだな。あとは、部隊によっては、魔術の研究もしている」

「・・・？部隊って何ですか？」

「部隊って言っても軍ではないが、我々のような小さな地域を回る部隊。大きな町に滞在する部隊。首都に滞在する部隊。研究を主にする部隊の四つに分かれているんだ」

ウエンディは、四つ・・・と復唱しながら、早く覚えようとしていた。

「そして、二年に一回、我々の部隊は、首都で過ごす期間がある」

「・・・それって王城に行くってことですか？」

「ああ、そうだ」

(アランに会えるかも)

ウエンディは、今は離れて暮らすアランの事を思い出していた。

物思いにふけてぼうつとしているウエンディに向かって咳払いをすると、ジョージアは話を再開した。

「それで、移動するから、荷物を片付けるんだ。さっ、始める、始める！」

ウエンディは、自分の部屋に戻ったが・・・

(あ・・・どうやって片付けるか分かんないや・・・。カレンに聞いておくんだっただな・・・)

領主令嬢として育ったウエンディには、『ただの片付け』は難しいことだった。

十九章（後書き）

ジョージア：なあ。質問していいか？

ん？なんででしょう。

ジョージア：なんでこの章は、短いんだ？ウエインディって寝起き悪くないか？ジソって落ち着いてないか・・・

！
答え切れないので、勘弁してください（汗）次回もお楽しみに・・・

二十章

片付けもどうにか終わり、荷車に自分の荷物を運ぶと、アレニウスにあった。

「ウエンディは、乗馬は出来るかの？」

「ええ。出来ますが。どうかしたんですか？」

アレニウスは、ホツとした顔で言った。

「それは良かった。乗馬を出来る者が少ないから、業者代わりになる者を探しておったのじゃよ」

「・・・？」

全部の準備が終わり、広場には、たくさんの村人とたくさんの荷物を後ろに付けた数頭の馬がいた。

「ウエンディは、悪いがその馬に乗ってくれ」

「はい！」

ジョージアに指された馬に寄ると、普通の栗毛ではあったが、目元には傷があった。

その馬は、とても苛立っている様子で、大男が二人がかりで押さえていた。

そんな様子を気にせず、ウエンディは近づいていった。

「危ないぞ、ウエンディ！」

グリーンが止めようとしたが、歩み寄り続けていた。周りのみなが、危険だと思い、目を背けてしまった。しかし、何も起きなかった。逆に鼻面を撫でていた。

「大丈夫だよ・・・。怖がらないで」

すると、馬は落ち着いていた様子になっていた。

「変わった子だ。あそこまで苛立っている馬に近づくのは危ないのに、怖がらずに近づくとは」

馬に乗り終えたアレニウスは、ウエンディを見ながら呟いた。

「昔、人に傷つけられたあの栗毛は今まで誰にも心を開かなかつたのに。団長……あの娘は何者なんですか？」

別の馬に荷台をくくりつけるのを手伝っていたジョージアはアレニウスに尋ねた。

「さあのう……。これだけは言えるのは、血と才能と運を持つ者なのだろう……」

遠くを見つめる表情をしたアレニウスをジョージアは見逃さなかつた。

何かを隠しているのは、アレニウスの言葉からもウエンディの言動からも明らかだった。しかし、まだ知ってはいけないのだ、そう思っていた。

「団長ー！この子、何て言う名前何ですか？」

ウエンディは栗毛にまたがり、鬣たてかみを撫でていた。

「まだ名はついとらんぞ」

「じゃあねえ……ロメルがいいわ。よろしくね」

栗毛は、鼻を鳴らして喜んだ。

首都への道を進んでいくと、やつれた様子の旅の衣装をした人々がたくさんいた。

「……彼ら、ガサラのダーウィンから来た難民らしいぞ」

「ああ、一、二ヶ月前から増えたよな」

ウエンディは後ろで話している団員の話が耳に入った。

「領主の死んだ後、二人の実の子どもの兄妹が行方不明になってしまつて、最近来た、妻が治めるようになってからとても増えたらしいな」

「悪政が始まつたんだろうな」

そんな話を聞いて、ウエンディはうつ向いてしまった。

（……城のみんな大丈夫なのかな？……カナナ、うまく逃げら

れたかな？・・・民は・・・」

帽子を引つ張って、深く被ったマントの下で心を痛めていた。すると、肩に乗っていたジンはウエンディの頬を舐めた。

（ジン・・・心配してくれたの？ありがとう。そうだよね。今、私たちがダーウインのこれからのために頑張らなかつたら、民のためにもならないわね。私にはアランもいるんだから頑張らなくちゃ）前を向き再びゆっくり歩みを進めた。

そんな様子をアレックスは、後方の馬の上で見ている。

サファルの都、ルビユの都大路は人で溢れ、あちらこちらから威勢のいい声が聞こえていた。商人達や市井の人達など様々な人々で賑わっていた。

ウエンディ自身はこれほどまで大きな都は、幼い頃訪れたガサラの首都・ビスツイヒ以来だった。

しばらく進み、森を抜けると、見るからに古そうな、それでいて荘厳な城が聳え立っていた。

「凄い・・・」

ウエンディは呟くと、ちょうど馬の横にいたセバスチャンが驚いた様子でウエンディを見上げた。

「初めて見るんですか？この城は、とても広くて、僕ら魔法団にも何部屋か部屋が当てられんですよ」

「へえ・・・心の広い王なのね」

しかし、王が近くにいるということは最もガサラ出身ということを言えない状況だということであった。

（アランはどうやってるのかな・・・）

城に近づくほど気になっていた。

二十章（後書き）

（ 今回は登場人物は登場しません ）

一日に二章分書いてしまいました（苦笑い）

少し前のほうの章に変更した部分もありますが、表記の仕方が少し変わったぐらいなので、サラッと目を通していただけたらと思います。

二十一章

王城に入ると、たくさんの人達が出迎えに来ていた。

「セバスチャン！新しい料理が出来たんだ。試食してくれないか？」

「グリーンさん！お帰りなさいっ。花、受け取ってください！」

「ねえ、また手品やってえ」

みんなの周りには、色々な人々が集まっていた。

（そっか。二年に一回来てるってことは、知り合いもたくさんいるんだ・・・）

異国にいることを改めて意識させられたウエンディはロメルをひき、厩こしに向かおうとした。

「はあ、はあ。レディ・ウエンディですか？」

十二、三の少年が走って寄ってきた。

白いシャツに黒いベスト、それに青いネクタイをした少年だった。周りに似た服装の人が多くを見ると、使用人の衣装のようだ。

「アラン様からのお手紙をお届けにあがりました」

「ありがとうございます。君は？」

目の前の少年に微笑みながら、手紙を受け取った。

「先日よりアラン・ウィーダン男爵の侍従をさせていただいている、サジです」

「・・・ウィーダン男爵・・・」

（なんで『ウィーダン男爵』なんて名乗っているんだろう・・・？）

ウエンディの悩んでいる様子を不思議そうな顔で、サジが見ていることに気がついて、笑顔を浮かべて礼を言うと、再びロメルをひいて、厩こしに向かい、そこで手紙を読むことにした。

ロメルを厩こしの部屋に入れ、木箱に腰をかけると、ジンも早く読めよ、という表情で隣に座っていた。手紙の封を開けると、アランの

気取ったような文字で書かれていた。

我が愛しい妹 ウエンディへ

直接会わずに此のような形ですまない。此の内容は、人に伝わるべきではないから、此の手紙は読んでしまったら、焼いて捨ててくれ。

報告が主に二つある。

別れてから僕は、アレニウス殿の推薦もあり、サファル騎士団に入る事ができた。今は、第三分隊にいる。

次は、悪い知らせだ。

サファル軍会議で、ガサラが国交を断絶して、諸外国との平和会議にも参加しなくなったという話が出た。噂では、ダーウィン領主がガサラの王に軍事強化を進言したらしい。

そのため、ダーウィン侯爵の名ではなく、ウィーダンを名乗っている。サジから今の僕の名を聞いたと思うが、男爵の位は、サファル国のゾリム陛下より戴いただいた。

これから、僕達の秘密にかかわる内容の話は、此のような手紙にして渡す。シーフの手の者がいるかもしれないからな。

ウエンディもどうか気をつけて。

アランより

二度読み直し、外には聞こえぬように、小声で唱えた。

「・・・フレイルム」

手の中に残った炭は風に運ばれた。

(やっぱり大変なんだ・・・)

ふっとウエンディの顔が陰ったが、隣に座るジンに笑顔を向けた。

「この話は、団長に伝えるべきだよね」

ウエンディは、ジンを抱いて厩を出た。

白髪頭の使用人と話しているアレニウスを見つけた。

ウエンディが近づくと、アレニウスも気づいたようで、話を止めてウエンディ近寄ってきた。

「どうしたんだね？」

「団長さん。あの、アランのことについてなんですけど……」

ウエンディが話始めようとする、手で話を止め、周りをちらちらと見た。

「……場所を変えよう」

ウエンディと自分の荷物を近くにいた団員に頼むと城に入った。

ウエンディは、スタスタと歩くアレニウスになかば走るようになっていった。

アレニウスの部屋は、グリゴール村での部屋が大きくなったようだった。その大きくなった広さも大量の本で埋め尽くされていたが。

アレニウスは、椅子に座るように示すと、話すように促した。

ウエンディが手紙の内容を話終えると、腕を組んで聞いていたアレニウスは、頷いた。

「アランのするようにした方が良からう」

その後、スツと真っ直ぐにウエンディの目を見た。

「シーフの間者がいるかもしれないからの……気をつけるのじやよ」

「はい」

ウエンディの隣に座るジンもニヤーン、と鳴いた。

二十一章（後書き）

色々突っ込みたい部分（シスコン発言とか）はありますが、今回も対談形式カットですみませんorz

二十二章

シイーフは、ダーウィン城で水鏡を眺めていた。

（ガサラも私のものになる……だが、障害となるあの兄妹の行動が読めない。何故だ……）

今、シイーフの見る水鏡は、濁っていた。

（まあいい。奴等には《私の手》が行っているのだから）

不敵な笑みを浮かべていた。

（うつ……何か寒気が。嫌な感じがする……）

ウエンディは、身震いして扉を閉めた。

「ああ、いた。ウエンディ、探したぞ」

アレニウスの部屋を出ると、ジョージアが来た。

「ん？……団長に何か用があったのか？」

ウエンディの出てきた部屋をチラリと見て言った。

「え、ええ。少し用事があった……あ、そうだ。探してたつて言っただけ、何かあったんですか？」

ジョージアは、無理矢理ごまかそうとするウエンディの様子に何か思ったようだが、話を進めてくれた。

「お前にも個人部屋が与えられているからな。案内してやる」

「あ。ありがとうございます」

サファル国の王城は、ナユヒツツアーク城と呼ばれ、ガサラ国の王城・ユハトワナーク城と同時期に建造されたと言われている。

主に、王や王に近い者達の部屋や大きな広間等がある本棟『白薔薇の宮』、騎士団が多くいる西棟『紅躑躅の宮』、魔術団などの長期滞在に使われる東棟『青水仙の宮』などがある。

「……っていうことは、私たちが滞在するのは、『青水仙の宮』なのですね？」

ジョージアは、納得顔のウエンディにチラッと目をやると、そのまま前にスタスタ歩いていった。

「ああ。そうだ」

部屋の並ぶ通路で足を止めた。

「そして……ここがお前の部屋だ」

金メッキのドアノブをひねってドアを開けた　　が、閉めた。

「……どうした？急に閉めて」

「いや……変なものが目に入って……ハハハ……」

首をかしげるジョージアを置いていってしまう勢いで回れ右をして、立ち去ろうとした。

「ちょっと待てウエンディ！この兄を見ておきながら閉めるとはどついう……あ、これはレディ、失礼しました」

部屋から出てきた銀髪の青年は、ジョージアに一礼すると、ウエンディを追いかけ始めた。

「だいたい何で主のいないレディの部屋にアランがいるの？手紙の意味ないじゃない」

「前、お前もやってたろ？良いじゃないか」

「ああ、そっか」

その結果として、ほのぼのとした展開に置いていかれたジョージアとジンは心の中で突っ込んでいた。

（そっか、じゃないだろ！）

二十二章（後書き）

アラン：やっと僕の出番が来たぞ

あ、そうですね。っていうか、突っ込み役がウエンディさんでは、無理なので考えなくてはいけませんね・・・

アラン：・・・何のことだ？まあいい。よし、このままウエンディとお兄ちゃんの物語で行くぞ！

行きません。次回も《漆黒と黄金の物語》を！よろしく願いします。

二十三章

「……たまにその夢を見るの」

ジョージアに事情を説明して、部屋に二人（と一匹）でウエンデイの部屋に入った。

ベッドの上に荷物を置くと、ウエンデイはジンを膝に乗せて、そのままベッドに座り、アランは書き物机の椅子に座った。ウエンデイは、アランに促され、アランから別れたあと、そして『夢』の事を話した。

「ダーウィンにいた頃には見ていなかったのだから？」

「ええ。でも、どこかで見たことあると思うの、あの草原……」

「お前の《勳》の一部なのかもな……」

「……」

二人とも真相が分からず、言葉に詰まったが、アランが話を変えようと口を開いた。

「……あ、そういえば、魔術団歓迎のパーティーには、出るのか？」

ベッドに座るウエンデイは、ぶらぶらさせていた足をピタリと止めた。

「……今何て……」

「え？パーティーに出るのかって……」

ウエンデイは、ドバツと立ち上がり、突然だったため、膝に座っていたジンは、床に落とされ、ふざけんな、と言っていた。

「何それっ？」

「聞いてないのか。魔術団の歓迎のパーティーだ。夜のパーティーに参加できる年頃の団員は参加すると聞いたが……って、お前どこに行くんだ？」

ドアに手をかけていたウエンデイは、あたふたしていた。

「ジョージアに聞きに行かなきゃ……だってドレス持っていないもの」

そう言うと、アランとジンを置いて部屋を出て行ってしまった。
アランは、暖炉の前で丸くなって寝始めた黒猫を眺めて、猫に話しかけていた。

「せっかく会いに来たのになんてひどい扱いなんだろうな」

まずアンタのその妹シスコン至上主義をどうにかしろ、銀色の目をチラッと開けて、ジンがボソツと言つと、反論した。

「失礼な！僕はウエンディが離ればなれになっていたことを寂しがつているに決ま……つて……ん？……何で猫の言葉が分かつてるんだ、僕……？」

ふと気がついた『事』に唸つて悩み続けるアランは、サジの迎えが来るまでずっとウエンディの部屋にい続けていたのであった。

ウエンディは、隣のジョージアの部屋に行くと、すぐさま仕立てに向かった。

「パーティーは今夜だからな……間に合うかどうかは怪しいが、聞いてみる」

「あ、お願いしまーす」

最初は、女官長と話始めたジョージアの回りをうろろろしていたが、近くで裁縫をしていた初老のお針子いしほの作業を見ていた。

「……ね、じゃあ此方こなたの董色すみれのにするわ」

少し離れた所から若い女性の声が聞こえた。

「それでは、今夜には間に合うように致します、エレナ様」

「あ、急がなくていいわ。貴女方も忙しいでしょう」

優しくに言う女性の声に、ほっと息をつくお針子達の様子や相手の言葉遣いから、相手が貴族であることは分かった。

興味がわいたウエンディは、そつと服の間から、見てみようとしていた。だが

「うろろろするな、ウエンディ。初めて来たんだから」

後ろから来たジョージアに止められた。

「あ、ジョージア。で、どうだった、ドレスは？」

肩をすくめて、ジョージアは答えた。

「今夜に間に合うには、無理らしい。採寸もしてないお前では、型紙やら何やらから今からは、難しいからな。そうだな・・・兄がせっかくな来ているのだから、ドレス姿も見せたいだろう。私のを貸そうか？本当は、体格の似ている者から借りた方が良いが」

ジョージアの申し出にウエンディは、考えてみた。

「・・・ジョージアから借りるとして・・・確実に背丈が違うから裾の長さは変わるし・・・胸も・・・うわっ、絶対着れない！」

ぶつぶつ言って、頭を抱えていたウエンディを不思議そうな顔でジョージアは、見ていた。

「おい・・・」

「私が貸しましょうか？」

先ほどまで自身のドレスを頼んでいた女性の声が後ろからした。

「え・・・」

ウエンディが後ろを振り向くと、侍女を一人連れた黒髪のレディがいた。気品が溢れ、黒い髪と同じくらい深い黒の瞳は知的で、好奇心を感じさせた。

「彼女に合うのは・・・そうね、紅の衣紋くれない えもんか掛けにかかったのを取ってきてちょうだい」

はい、と言って駆け出した侍女を唾然としてウエンディは見ていたが、ジョージアはレディに話していた。

「悪いな、エレナ」

「そんなことないわ。それで、そちらの彼女は、騎士・アランの妹君という噂は、本当かしら？」

「ああ。そうらしい。だろう？」

呼び掛けられて、やっとハッと気づくと、ジョージアに尋ねた。
「彼女はどなたなの？」

「エレナ。ヒヤス又公爵家の令嬢だ」

(こ、公爵！)

ウェンディは、驚きで目を丸くしたが、エレナは、やんわり否定した。

「公爵令嬢と言っても、お父様が国王の弟だと言うですし。私も弟も魔術団に入ってるから、そんなに貴族のような事はしていないわ」

「え・・・ということは・・・」

「私は、首都駐在の魔術団員の一人よ。宜しくね」
にこつと微笑んだ。

二十四章

エレナの侍女が、一着のドレスを抱えて来ると、ウエンディに手渡させ、またあとで、とエレナは、部屋を後にした。

そのあと、呆然とするウエンディを連れて、ジョージアは自室に帰った。

「おい。着付けるぞ」

侍女が普段やるようなことを慣れた手付きで、自分のコルセットなどをクローゼットから出している様子を見ながら、ウエンディは、自分の着る借り物のドレスを見ていた。

エレナが選んだドレスは、ウエンディの瞳に合わせた空色で、あまり派手でなく、袖や深い襟ぐりにレースがあしらわれ、濃淡を変えた薄布を重ねたスカートは、彼女の金色の髪のように動く度に違う雰囲気を与えるものだった。

ジョージアに着付けてもらいながら、いつも着るような首もとが隠れるドレスでは無かったため、首にかけている《ローズクォーツ》にふと気づかれた。

「・・・これは着けるのか？」

「え？ああ、そうね・・・着けていくわ・・・」

何か不思議な力を持っていることは感じていたので、肌身離さず持ち続けていたのだ。

温かくなったり、冷たくなったりする変わった宝石は通常では有り得ないことは分かっていた。

だが、《閻魔術》のようなものではないと感じていたので、手放さなかった、いや手放せなかった。

理由はウエンディにも分からなかったが。

ボーツとしていたウエンディの着付けも終わり、何か思い立ったようにジョージアはウエンディを部屋から追い出した。

「ちよっ・・・ジョージアの着付け終わってないじゃない。私、手

伝うよ」

「必要ない。それに、お前は着付けは出来ないだろ？」

「あ……」

着付けられることには馴れていても、着付けることは出来ないことにやっとなつてしまったのだ。

結局、締め出されてしまった。

パーティーは、儀礼的なものが終わり、ダンスの音楽が流れ始めた。

ウェンディは、所在なく壁際に立って賑やかな様子を眺めていると、グリーンがグラスを持ってキョロキョロしているのが見えた。

近づいて行くと、グリーンはやっとなつて気が付いて、何やら見るからにオロオロした様子だった。

「な、なあ……ジョージアは来てるか？」

「少し遅れてくるかもしれないけど、来るとは思うよ」

「そ、そうか」

落ち着きなく、グリーンは、周りを見渡していると、ピタリと止まった。

不思議に思ったウェンディが視線の方向を見ると、真っ赤な髪が映えるような黒いドレスを来たレディが入ってきたのだ。

「あ。お、お前もパーティー楽しめよっ……！」

そう言つと、突進するような勢いで赤髪のレディに向かつていった。

独り取り残されたウェンディは、近くを通りかかった給仕にグラスをもらつと、飲むわけでもなく、くるくる回っていた。

（楽しむつて言つたつて……仕方ないから、アランでも探そうかな？）

結局、持っていたグラスを給仕に渡すと、アランを探そうとした。だが、全く違う人と目が合った。

その人は、ウエンデイの前に歩み寄って、すっと白い手袋に包まれた手を差し出した。

「レディ。一曲、踊っていただけますか？」

ダンスを誘ってきた男は、年のころでいえばもっと上なのだろうが、少年とも呼べるような容貌で、他の男性よりも身丈が低く、小柄なことから無邪気な印象も与えられた。金色の髪はウエンデイのように輝き、エメラルド翠玉色の光を瞳に宿していた。

「よ、喜んで」

断る理由も無かったので、手を握る。引かれるままに広間の中央に連れられると、体が固くなっていることを感じながら、踊った。

「自己紹介していませんでしたね？ボクは、タヒュテイン家のロジャーと言います。レディは……」

「ウエンデイです」

「素敵な名前ですね」

爽やかに微笑んだ顔やさらっといった言葉には、ドキッとさせるようだった。

ウエンデイは、真っ赤になった顔で目をそらすと、ロジャーは尋ねてきた。

「騎士・アランの妹君でいらっしやるといっ話を聞きましたか？」

「ええ。そうですが」

（アランのことばかり聞かれる……アランが有名なのか、もしくは……疑われている？）

その考えが顔に出たのか、ロジャーは微笑んで安心させようとした。

「特に深い意味はありませんよ」

曲も代わり、より密着する曲にならざるえない状況になっていた。何か話題は、と探していると、ロジャーの方からまた話しかけてきた。

「ウエンデイさんはおいくつですか？」

「来月で十六です」

「あ、僕の方が上ですね。十九です」

えっ、と驚いた。

その反応に、苦笑を浮かべた。

「よく驚かれますよ」

「すみません……。と、年上なら敬語はお止めください」

ロジャーは、その反応に、優しげに目を細めると、甘い声で微笑みかけた。

「君もそうしてくれたら嬉しい」

余計に真っ赤になったウエンディを面白がっているようにも見える。

無理やり平常心を保とうと、ロジャーから目を離すと、アレニウスと目が合った。何やらこっちにおいでと言いたげな感じだった。

ちよつと曲が終わると、ウエンディは、失礼しますと軽くドレスの裾を持ち上げながら言い、名残惜しそうなロジャーから離れた。

ウエンディは、アレニウスの目線に気づいても、踊り始めた時から浴びせられていた女性の嫉妬のようなものや男性の興味の視線には気づいてはいなかった。

二十五章

ウエンディは、アレニウスのもとへ歩み寄った。

「ちょっとついておいで」

「え？どこに行くんですか？」

「陛下にご挨拶はすべきだろう」

「……えええっ?!」

足をふと止めると、近くを歩いていた給仕にぶつかりそうになっていた。

「でもこの国では……」

「陛下も君に会いたいとおっしゃっておるのじゃよ」

「どうし……」

「アランは、陛下には話したようじゃ」

「……」

ウエンディは、自国の王族に会うことはしばしばあったが、国王、ましてや他国のトップに会うと言うことに、緊張でガチガチになっていた。

「ウエンディ、手と足が一緒に出とるぞ」

「は、は、はいいー!」

返事はしたが、直りそうもない手足とひきつった顔は、はたから見ても、明らかに緊張していた。

ウエンディは、目を移すと、いつもなら手順をおわなければ、謁見できないだけに自分の話を聞いていたどころと、貴族たちは我先に国王・ゾリムのもとに集まっていたのが見えた。

これは会うのが大変そうだ、と思ったウエンディは、偶然ふと王と目が合った。

「おおアレニウス殿。そちらがレディ・ウエンディか」

「そうですぞ。陛下」

ゾリム王は、周りにいた他の貴族を退くように合図すると、近く

には、玉座にいる王と王妃と周辺を警護する数人の騎士だけになった。

ウエンディは、教育熱心だった父のお陰で知っていた王家に対する礼をとっていた。

「顔をあげてよいぞ」

ウエンディが、顔を上げると、先程は遠目から見たためよく分らなかったが、玉座に座る王も后も深く知的な黒の髪をしていた。

黒髪・黒目は、サファルの王族に、受け継がれる色とも言われていた。そして、優しげでいて、凜とした黒い瞳は、大国の王としての威厳が感じられた。

「・・・確かに・・・に似ているな」

ゾリムが驚いたように呟いた言葉は、ウエンディには聞こえなかった。

「・・・陛下？」

首をかしげて尋ねた王妃や不思議そうな顔のウエンディに気がついたのか、笑みを浮かべ直した。

「君たち兄妹の事情は分かっている。出来る限りの事はしよう」

「あ、ありがとうございます。ゾリム陛下」

アレニウスは、ウエンディにホールに帰っていいと言つと、王と話始めた。

「アレニウス殿。彼女は・・・」

「ソフィアにそっくりです。ワシも初めて会ったときは、昔のソフィアにそっくりじゃったから驚いたよ」

王妃は病弱で、具合が悪くなったため先に中座していた。ゾリムとアレニウスは話していた。

「彼らは、ソフィアの出生は知らないのですかね？」

「ええ。侯爵は何も伝えてはいなかったようですぞ」

ゾリムは、ふうつと息をつくると王座にもたれかかっていた。その

双黒の瞳は、ホールの端にたたずむウエンディに、誰かを重ねて見ている。

まだ続いていた、花が舞うように躍るダンスをウエンディは、壁際に立って見ていた。

「おい。ウエンディ、壁の花になっっているぞ」

そこに夜会服を着たアランが近づいてきた。

アランもウエンディと似たような空色の服を着ていた。

「そんなこと言われても、知り合いなんていないし……」

ふっと目を伏せたウエンディを哀しげに見ていたが、すっと息を吸い、アランは、ウエンディの手を引いた。

「じゃあ踊るか？……久しぶりに」

最後の言葉は、二人にしか聞こえないほどの声で囁いた。

踊り始めると、少しウエンディの顔は晴れた。

「あ……もしかしてアランが踊りたかったんじゃない……」

「この兄は、モテモテの妹を守ってやらなければいけないのだ」

アランの言葉に、えっ、とした顔をして周りを見渡すと、多くの瞳が集まっているのに、やっと気がついた。

「僕の正体とか、王から謁見を普通にした君の事とか、自分自身や子弟の婚約相手を探す貴族さんたちだろうよ、彼らは」

これだから貴族は、というため息をつきそうな顔をしていた。

「ま、踊りなよ」

アランは、また同じ言葉を口にすると、軽く礼をした。

曲が一旦途切れた。

次の曲はパートナーが入れ替わるものだ。

何人目だろう。濃い紫の夜会服を着た年下の男性になった。

どこか見覚えがある黒髪の男性で、誰かなと、お互い首を傾げていると、やっと思い出した。

「……あ！」

相手は、アレックスだったのだ。

眼鏡をとった容姿は、普通にダンスの場に馴染んでいた。

周りに聞こえないように小声で囁きあっていた。

「……何がいるの……？」

「……ボクは、姉上に無理やり参加させられたんだ……！」

「……無理やりって……」

そこまで話したところで、曲が終わった。

お互い、形式的に礼をすると、アレックスは人混みの中に消えていった。

「……何なんだろう、あの子」

誰にも知れず、ウェンディが呟いた言葉は、終了を宣言した王の声にかき消されていた。

二十六章

頬を差すような寒さは、確実に冬に近づいていることを知らせていた。

ウエンディは、あまりの寒さに、うつすら目が開いたが、それよりも眠気が勝っていた。

「うう………ん………」

もう一度寝ようと、もぞもぞと頭まで被ろうとした。が

「………つぶぐーう………！」

顔の部分に何かが乗っていた。

「ぷはっ！………また君か！………」

ピヨンとベッドの隣にある椅子に飛び移ると、黒猫は、素知らぬ顔で後ろ足で掻いていた。さつさと着替えないと、フリッツの魔術指導があるんじゃないか？、とチラツとウエンディに目を向けて言った。

「………あ。そうだった………」

はあっと深いため息をつく、いつも着ている物の上にスカーフを何度か首に巻き付け、寒さ予防をしていた。

「集合場所は、屋外だって言うし。寒さなんか関係なく、全く容赦しなさそうだからね、あの人」
フリッツ

朝から確実にテンションが下がったウエンディだった。

ウエンディは、集合場所にされていた、『練習場』への道が分からず、侍女や小姓に聞きながら、向かっていた。

「ねえ、ジン。《風魔術》の練習って必要だと思っ？」

肩に乗っていたジンにふと尋ねた。

さあな、だが《風魔術》は、必要になることになるかもな、と猫

らしくない『眉間に皺を寄せた表情』になっていた。

「団長さんしか魔術団の中でできないって言うけど忙しそうだし、フリッツさんには、もつてのほか教えてもらえないし……。あ……。ジン、この話はまた後でにしよう?」

ウエンデイの足は止まった。

その視線の先には、フリッツが、ただでさえ寒い気温を下げてしまふような底冷えした白銀の瞳で仁王立ちしていた。

「遅いぞ。いつまで待たせるつもりだ。日が暮れてしまふ」

まだ朝です、と反論を口にしそうになったが、開きかけた口を閉じた。

彼以外にその場にいる女性がいたからだ。

「あら。おはようございます、ウエンデイさん。昨日は楽しめましたか?」

ニコリと優雅に微笑んだ黒髪の、ウエンデイより二、三歳ほど年上の美女は、昨晩とまた違う実用的な暖かそうな服を身に纏っていたが、貴族らしい雰囲気はしっかりあった。

「はい。……。って、エレナさん。どうしてこちらに……。・。・?」

すっかりエレナの朗らかな雰囲気呑まれかけたウエンデイだったが、どうにか持ち直していた。

「団舎だんしゃに行つてしまふ前に、貴女に会つておきたくてね?」

「はあ……。ん? 団舎だんしゃつて何ですか?」

機嫌が悪そうに腕を組んでいたフリッツが説明した。

「王都駐在部隊の事は聞いているだろう。其その部隊には、近くの高台にある治療院の隣にある《魔術院》の運営をすることが仕事だ。

それに伴つて、近くにある棟むねに殆おほどの団員は、暮らしている。其その場所が通称・団舎だんしゃだ」

「私の場合わたくし、普段は此方こゝか、自分の城で暮らしておりますので、仕事に行くのですけれどね」

「そうですね。・。・。」

自分のような国境付近貴族とは、違う雰囲気いなかぎよくを醸かもし出すエレナに、唯唯ただただ凄いな、と感じていた。

「おい。ボサツとしてないで、さっさと始めるぞ」

「はい……エレナさんは？」

「私は、見てるわ」

それまで浮かべていた自然な微笑みとは違う、何か哀しいことを隠すような微笑みがあったが、一瞬で消えた。否、ウエンディが見れなくなったのだ。

「……《ダーチィ》」

「どわあ！」

ウエンディの足下の土が穴が開いたように柔らかくなり、沈み込んだ土と共にウエンディは、落とし穴に填まっていた。

不意打ちをしかけた相手は、穴を見下ろしながら、鼻で笑っていた。

「ふん。注意を反らすからだ」

「今のは明らかに話し中の所を狙いましたよね！」

頬を膨らませて、見上げるウエンディは、目の前の土の壁に両手で触れていた。

「……ハッ！お前もしや……！」

ウエンディのその後のにやりとした表情に、フリッツは逃げようとしたが、遅かった。

「《ダーチィ》……！」

フリッツの足元が一気に無くなり、フリッツの身丈の倍以上の深さの穴に落ちていた。

「要するにあれですよね。土の軟らかさを変えられる術なんですね。いつの間に穴から出たのか、ウエンディは服の土を払っていた。

「というわけで、今日『も』私の勝ちですね、フリッツさん。ジン、私ちよつと砂だらけだから、着替えてくる」

穴に落ちる前に肩から飛び下りていたジンに声をかけると、エレナに軽く礼をして、練習場を後にした。

「…………フリッツ。『今回も』って、貴方、毎回負けてるんですか？」

地面を硬くして、持ち上げたフリッツは、眉間に皺を寄せていた。「……………ああ。論理的に教えるのは何となく分かっているよ。うだから、実際にやって見せている。口では、負けたことはないがな」

「……………口ではって……………。貴方、そんなことでは、あの子はウエンディ気づかないわよ」

「……………何にだ？」

不思議そうに問うフリッツに、エレナは、肩をすく竦めてため息をついていた。

二十六章（後書き）

お久しぶりの後書きへのキャラクター登場です

フリッツ：なあ、作者。エレナが言った意味を教える。

教えるといわれても…。読者の皆さんは、分かっているかも知れませんが、改めて言う必要は…

フリッツ：ふんっ！

あ（汗）。そ、そんなに拗ねなくても…。

フリッツ：拗ねてなどいない。次回も楽しみに待っている。新しいキャラも出るからな

やっぱり拗ねてるでしょ汗。

二十七章

数日経ったある日。
城内は騒がしくなっていた。

そうとも知らず、ウエンディはいつもの朝の魔術練習　魔術対決とも言えるだろうが　を終え、濡れた服を着替えるためにジンを後ろに連れて、部屋に戻っていた。

その時、身長をゆうに越えている重なった箱を持っていたサジの姿が見えた。

「あ、サジくん」

突然声をかけられて、ビックリしたのが、二個落ちてしまった。

「あわわ、すいません。レディ・ウエンディ」

「こつちこそゴメンね、驚かさせて。ところでその大荷物は何？」

ウエンディは、年下は苦手ではあったが、それは、四、五から七、八歳の子供のことだったようだ。現に十二、三歳ほどのサジには普通に話しかけていた。

「これらは、アラン様の御荷物とアラン様がウエンディ様にと贈られる、冬用の上着と今夜のドレスです」

「私の？そんなの要らないってアランに言っておいてくれない？たとえ今夜のドレスだったとしても……ん？……ん？……今夜の……今夜の……今夜の……今夜の……今夜の……今夜の……今夜の……今夜の……」

急に驚きだしたウエンディにサジはまた荷物を落としそうになっ

ていた。

「ど、どうしたんですか？」

「今夜?!……って、今夜は一体何のパーティーなの?こんな御時せ……」

ウエンディは慌てていたが、理性を取り戻して後半の言葉は飲み込んだ。

(あまり人々には広まっていない不安を伝えない方が良いよね……それに、相手は子供だし……)

言葉を無理矢理繋げるため、わざとらしく咳払いをして続けた。

「そ、それで、何のためのパーティーなの？」

「はい。第一王子のリチャード殿下が東部のギーゼ砂漠への遠征からお帰りになさったので、その無事を祝すそうです」

「お祝い好きなのかしら……ゾリム陛下は」

王のことに對して、そのような言い草は失礼だろうが、ウエンディは、呆れた表情になっていた。

「あ、それで、私の荷物って言うのはどれ？」

「その落ちてしまった二つの箱です」

ひょいとウエンディが目で指された箱を持つと、元通りサジの荷物の上に乗せるのではなく、自分で運び出した。

「あっ、いけません。御荷物を運ぶのは……」

「いいの。どうせ行く方向は違うでしょ?それに、アランは、騎士

「ただど私はただの魔術団員だし……」

「いえ。魔術団員の方も騎士と同じぐらいの地位になりますよ」

「え……。そうだったんだ」

新たな他国事情おとなりじこじょうを聞いて、なるほど、と頷くウエンディは、啞然とするサジを置いて、自分の部屋に足を戻した。

（新たな発見ってあるものね。それに、王子ってどんな方なのかな？）

ウエンディが自分の部屋につき、一度床に荷物を置いて、扉を開くとジンが、出る前に消したはずの暖炉の前で寝そべっていた。

「ちょっと。いつの間に戻っていたの？」

荷物をベッドに置くと、机の上に置いていた、小さな風車を回していた。それは、グリーンに作ってもらったもので、風が吹けば回る仕組みのものを、と作ってもらったのだ。

さっきだ、と機嫌悪そうにグダツとしたジンの様子にいつもとは違う具合を感じていた。

「風邪でも引いた？お医者さんに見てもらった方がいいんじゃない？」

「俺の心配はいいから、自分の心配しろよ、とウエンディの言葉を無理矢理遮った。

「そうだった。今夜はパーティーがあるのよ。だから、遅くまで帰ってこれないから、食べ物置いていくから、早く寝てね」

ウエンディは、パタパタと、ベッドに一度置いたドレスを持って
ジョージアの部屋に行くと言い、部屋を出ていった。

一人残されたジンは、だるそうに身体を持ち上げると、昼の明る
い中を青く光る、月を見定めながらいた。

そして、次の瞬間には、部屋の中には、黒猫の姿は無かった。

ゾリム王の第三子であるリチャード王太子は、王と正妃の間に生
まれた唯一の子供だった。

先に生まれた二人は、流行り病で死に、リチャードを生んだあと、
元々身体が弱かった正妃は、その後子供は生めなかった。

そのリチャード王子はというと、自分の知識を広げるためにと、
自ら遠方へも向かったり、積極的に剣の技を磨いていた。

学識もあり、国中の有名な学者達から学び、王子と論ずることが
出来る者は少ないとも言われる。

そのことから未来を期待されていて、『漆黒の賢聖』^{けんせい}と呼ばれ
ていた。

「...と、有名な所はそんなところだ。まあ、私的な面で知りたけれ
ば、エレナに聞くといいと思うが」

「へえ...」

ウエンディはあまりに凄い噂の王子に、驚いていた。

「でも、お前の兄は気が早くないか？招待も決まってるのに・・・」

「いいえ。ウエンディは強制的に出席です！私からわたくしお父様をお願いしたのでから大丈夫ですわ」

突然ジョージアの部屋の扉が開いたかと思うと、そこにはエレナがドレスをきちんと着ていて立っていた。

「え。どういうこと・・・」

「問答無用っ！ウエンディさんをお連れしなさい」

後ろに控える侍女に命じると、エレナも侍女達もニヤツと笑った。
・・・ようにウエンディには見えた。

「・・・ひっ！」

予想以上に強い力で有無を言わせず、あっという間にウエンディを連れて行ってしまった。

それについていこうとしたエレナは、後ろから名を呼ばれたことに気が付いた。

「どうせお前だけの企みじゃないんだろう？」

ややため息混じりのジョージアの言葉に、いつもの微笑みで仮面を着けた。

「・・・さあ？」

「お前がはぐらかす時は、大抵秘め事がある時だ」

しばらくそのままの微笑みでいたが、無理だと判断したのか、ふつと息をつき、肩を竦めた。

「駄目ですね。ジョージアには隠し事が出来ないようです」
「それで、今回は？」

ジョージアは、椅子に座り直し、男物の下衣を履いた足を組んだ。

「ロジャーに頼まれたのたのと、伯父様からよ」

「陛下から？」

「何故かは分からないわ。でも、私もあの子は氣に入わたくしったから、此この役を買って出たのよ」

少し考えたようなジョージアは、しばらくして口を開いた。

「私は行く必要はないのだな？」

「ええ。あ、ジョージアも来たかったかしら？」

「いや……。国立図書館に行くてくる」

長いコートを掴み、羽織ると、暖炉の火を消した。

そして、思い出したように部屋から立ち去ろうとするエレナに声をかけた。

「それと、その荷物をウエンディに持っていつてもらえないか？
彼女の兄からのドレスらしい」

近くに通りかかった侍女に運ぶ指示を与えているエレナの声を聞きながら、ジョージアは外へと向かった。

二十七章（後書き）

最初に、謝らなければいけないことがあります。

次回新キャラが出る、とか言っておきながら、出せませんでした（

）（・・・；）

ごめんなさい。次回こそ頑張ります（；、、（

次回の予告をしておくよ

- 1．今度こそ新キャラ登場？（いや、断定しようよ
- 2．ジョージアさんの調べものとは？（入りきるかな・・・
- 3．パーティーでは、ウエンディ真つ赤に?!（まあ、誰にとは言いませんが

そろそろ番外編（主にジンくん？かお兄ちゃん。）も書こうかなと思ってるので、次の次か・・・その次か・・・そのまた次か（いつだよ?!）

ま、そんなこんなで早いうちには出そうと思います。

ご意見・ご感想、ご指摘お待ちしておりますm（）（）m

二十八章

王も王子も入ってきていない大広間は、貴族同士の談笑でざわざわしていた。

（もう。エレナは、王族だから後から来るって言っし、『知り合いがいるはずよ』なんて言ったのはどこの誰よ）

前と同じ興味深げな貴族の視線に所在なく壁際に立っていたウエンディは、エレナとの別れ際に話した会話を思い出していた。

『え！後でつて・・・』

大広間入る扉で突然言われた。

『王族は後から入る決まりなのよ。それに中には貴女の知り合いもいると思っつわよ？』

『知り合いなんていないんですが』

心底不安げなウエンディに、エレナは、いつもの余裕の笑みに、上手なウイंकがついてきた。

『ふふふ。それは、お・た・の・し・み』

そんなことを思いながら、本当に『知り合い』がいるのかと、辺りを見渡すと、金髪の少年　否、歳で言うなら青年なのだという男と目があつた。

(確かに『知り合い』だけど……)

彼は、近づいてきて甘い微笑みを見せた。

「良かった。エレナには、貴女レディが来ることは聞いたのだけど、見つからないからどうしようかと思っていたよ」

金色の髪に翠玉エメラルドの瞳を持つ青年、ロジャーだった。

爽やかなロジャーにぴつたりな淡い青色の夜会服を着ていた。

そして、ウエンディはというと、蜂蜜色の髪は結い上げられていて、紫色の花を挿していた。アランから贈られたドレスは、銀の刺繍の入った落ち着いた薄紫色の胸元が広く開いたものだった。

そんなウエンディを頭のでっぺんから足の先まで眺めると、そつとウエンディの手を取り、口づけをすると、二人だけにしか聞こえない声で囁いた。

「今日も可愛いね」

すぐにウエンディの首から上は赤くなっていた。それを面白がるようにロジャーは、笑っていた。

「ほら。陛下とりチャード『王子』がいらしたよ」

ロジャーが目を移したのを見ると、それに合わせてウエンディも壇上を見ていた。そこにゆっくりり姿を表した、男性にウエンディは、目を凝らした。

長身のゾリムと同じか、大きな背丈で、剣術のおかげであろうが、つしりした体格で、王族を表す漆黒の髪が、目映まはいばかりの光を落ち着かせていた。

「ねえ。ボクと彼、どっちがいい？」
「へっ？」

突然言われた言葉にウエンディは、驚いていた。
また後で決めてもらおうと、と呟いたのはウエンディには聞こえていなかった。

パーティーが始まってから、二時間ほどが経過していた。
エレナとも上手く合流し、ロジャーと親しげに話すエレナの横で、時々相槌を打ちながら、そっと目だけ動かしていた。

ゾリムは相変わらず玉座にいたが、リチャードは一通りの挨拶が済むと、人の輪に降りてきていた。我先に彼に話しかけようとする人波に吞まれてしまったあとは、その姿は見れずにいた。

直接、王子には会えないだろうな、と一人で考えながら壇の回りを見ていた。

「エレナ、元気だったか？」

突然後ろからかけられた声にウエンディが、驚いて振り返ると、笑顔ひとつ浮かべていないながらも、漆黒の髪に瞳。獅子のような高雅な気品が滲み出ている。端正な顔立ちの、黒い夜会服を着た王子の姿だった。

「ええ。リチャードはどうでしたの？」

「私も大して変化はなかった。ところで、公爵領での例の一件のことだが……」

「ボクに対しては何も無いのかい、リチャード。寂しいな」

ロジャーの顔は、笑ってはいるのだが、口の端がピクリとしていた。

「ああ、忘れていた。タヒユティン卿はお元気だったか？」

「そんな『タヒユティン卿』なんてよそよそしい。ええもちろん元気でしたよ」

敬称も付けない言葉遣いに、仲の良さが感じられていて、ウエンディはきよとんとしていた。

その様子にやっと気がついたのが、エレナは紹介しだした。

「あ、忘れてたわ。リチャード、此方は、ウエンディ、ウエンディ・ウィーダン。魔術団員の一人です」

紹介されたウエンディは、軽くドレスを上げて膝を折って頭を下げた。

「殿下とボクらは、幼馴染みなんだ。昔はよくこの城で遊んでいたよ」

ロジャーが軽く説明すると、急にウエンディの手を掴んだ。

「ね。踊らない？」

「べ、別に構いませんが……」

「君のダンスは素敵だよ」

人目を気にせずと言う科白セリフに、ウエンディはまた赤くなっていた。恥ずかしさのあまり目をそらしていたが、そんな様子を気にせず、ロジャーは楽団の奏でる曲にあわせ、優雅にリードしていた。

「この間、アレックスとも踊ってたよね？」

「え、ええ」

急に何だと言わんばかりの話の振りにウエンディは、驚いていた。

「彼とは知り合い？」

「同じ魔術団員ですし・・・知り合いと言われれば、知り合いです
が・・・」

「ですが？」

続ける言葉をどう言えばいいのか、一瞬迷いながら言葉を選んで
いた。

「一方的にライバル視されてるっていうか・・・何ていうか・・・」

「へえーライバル・・・か。じゃあ彼は大丈夫かな？」

「・・・何がですか？」

「何でもなーいよ」

少しテンションの高くなったロジャーを不思議がりながら、曲が
途切れたのを聞き、エレナもとに戻ろうとした。

しかし、また手を引かれているのに気がついた。

「え？」

手を引いていたのはリチャードだった。

周りをチラリと見ると、王子と踊るのかと、興味と驚きの目が向
けられているのが感じられた。

それにたじろいで、手を離そうとしていた。その反応に、機嫌を
損ねたとでも言いたげな目で、離そうとしないばかりか余計に強め

に握っていた。

「あいつ（ロジャー）は良くて、私が駄目な理由はないだろう？」

「いや・・・そういうことじゃなくて・・・ひゃっ！」

ウエンディは慌てて、足を滑らせてしまった。

転んでしまう、そう思った。

しかし、次の瞬間は背中が大理石の床にぶつかるとはなかった。

「あれ・・・？」

リチャードはウエンディの腕をすつと引っ張り、掴んでいたから転ばずにすんだ。

「あ、ありがとうございます・・・」

ウエンディもリチャードも手を繋いだままの状態で、リチャードの方に体重をかけたままという微妙な姿勢のままだった。

「・・・いつまで俺の手に体重をかけるんだ？重いんだが」

「・・・っ、失礼しましたね！」

ウエンディは思わずカツとなり、目も合わせず立った。

握られていた手を振りほどこうとした。しかし、離せなかった。

「今から踊るのにわざわざ離す必要はないと思うが？」

音楽も始まり、やや無理矢理にリチャードがダンスを始めさせると、体は接近していたが、ロジャーとは違い、話は弾まなかった。

気まずくて、目を合わせる訳にもいかず、ウエンディの視線が宙

を泳いでいた。

「……………顔を見ていないとまた転ぶぞ」

急にリチャードに話しかけられ、逆に転びそうになっていた。

だが、そう言われると仕方ないので、目を見るようになると、双黒の瞳に吸い込まれてしまう気になっていた。

(綺麗な瞳……………)

思わず見つめてしまっていると、目があった。その漆黒の瞳には、チラリと面白がる色が見えた。

「……………そこまで見なくてもいいだろう……………」

(は、はあああ?!)

また突然言われた失礼極まりない言葉に、カチンときてしまったウエンディは、わざとヒールのある踵で踏んだ。

「……………」

痛がるリチャードにもう目を合わせてやるか、とふいつと顔を背けるウエンディは、顔が赤く火照っているのを感じていた。

ジョージアは、暗くなった室内で、ランプを掲げて背表紙を探し

ていた。

「あつた……」

分厚い本を机に置き、ページをめくっていた。
そして、手が止まった。

『王家の系図について』

「……第十五代国王クアンツエの子供は、正妃からは、第十六代国王ゾリムとヒヤス又公爵ヴァルゾが……そして第二妃からは、生まれた公式の場には出てこない……イ……がいた……彼女は、他国に嫁いだとされている……」

羊皮紙に書き写すと、本を元の場所に戻し、その場から離れた。

「……あの可能性はやはり高いな……」

ジョージアの呟いた声は、誰にも聞こえてはいなかった。

二十八章（後書き）

やっと出せました、新キャラ。めっちゃ重要な人・・・だと。

ジョージアさんは、何を分かつちやっただんでしょーね。

次回も新キャラ・・・出ると思います

二十九章

「なあ……ローズ。急に俺の具合が悪くなった原因って何なんだっ？」

少し気がたつている黒髪の青年が、優雅にお茶を飲む、桃色の髪の上品な雰囲気のある女性に聞いていた。

「私も今は霞んで向こうの世界が見えていないのよ。兄様に聞けば？」

「彼奴の持ち主は、今は彼女と離れているから意味ねーよ！」

「《闇魔術》関連じゃないかしら。それとも……あの子が行っちゃってるからかもしれないわね」

「あの子って……まさか、あの『変態猫』か?!」

青年は、眉をひそめた。

「『変態猫』は、同族に失礼でしょ。どうしても行ってみたって言うものだから、送ってあげたのよ」

「……っ、帰る!!」

青年は、女性に背を向け、その場から立ち去ろうとした。

「まだ原因が分かってないのにいいの？」

「そんな場合じゃないから、後で調べておいてくれ。ウエンディの貞操が……危ないっ……」

「そんな警戒しなくてもいいじゃない。彼は……」

もう姿を消した青年に向かって聞こえてはいないと分かっていた

が、話していた。

「親友だったんだから、少しぐらい信用してあげなさいよ」

彼女の飲んでいたお茶には、波紋の中に庭園の歩く一人の少女がうつすら映っていた。

外の空気を吸いに行く、とエレナに伝え、リチャード達三人から離れた。

「はあ………」

ウエンディは庭園にあった木の下のベンチに、周りに誰もいないとわかると、ストーンと崩れ落ちるように座っていた。

「……まったく。王子があんなだとは思ってもみなかった……」

一人で空を眺めながらぼやいていた。

「第一、『体重』とかレディに向かっていう言葉じゃないわよ。あの場は普通、手を引っ張ってあげるとこだと思っただけど」

『そりゃあ、大変だったねえ、嬢ちゃん』

「そうなんですよ……って、誰?!」

一人言に返された間延びした男の声に驚き、辺りを見渡したが、

誰もいない。

『ああ、ゴメンね。姿を見せてなかったね・・・っと!』

その男は、ザサツという枝葉の音をさせ、ウエンディの目の前に突然しなやかに降り立った。

まるで猫のような機敏でしなやかな動きをする男だった。しかし、それが分かるだけで、辺りを唯一照らす月明かりが、雲で隠れて顔まで見えなかった。

「・・・だから、誰？」

「あーあ。そんな色気なく目を細めたりしないです。オレを見たいのは分かるけど、かわいい嬢ちゃん顔に似合わないからさ」

見ず知らずの男が、さらりと言う科白セリフにたじろいでいた。

その隙に、ウエンディの右隣に近距離に座ってきた。そして、ウエンディの腰に腕を回した。

「ほーら。これで目を細めなくても、オレの顔が見えるでしょ？」

そう言って近づけた顔を見ると、ちょうど顔を出した月明かりで照らされた男は、夜会服は来ていなかった。パーティーの招待客ではないことは分かった。

甘く整った顔立ちは、愛嬌のある二十歳ぐらいか二十代前半くらいの青年だった。

シナモンのような薄茶の髪は、男性にしては長い方だろう肩に少しつくぐらい長さで、ウエンディと似ている空のような青い瞳をしていた。

ニコリと笑うと、チラリと覗く尖った歯や、その瞳の虹彩がくつきり見えてしまうほどの近距離に顔があることに、やっと気づき、

腰に回った手を振りほごうとした。

ふと、昔、城で若い侍女から聞いていた言葉を思い出したからだ。

『見ず知らずの男に急に迫られたら、逃げてくださいね？ダンスでもない限り近づいてくる輩は……純情な乙女にとって、そんな狼はとても危険です』

(危険なのは……今なら分かる気がする……！)

離そうとしない男の手をやや焦りながら、振りほごうと頑張っていた。

「ち、近いんですけど……！」

「わ。そんなに慌てちゃう嬢ちゃんもかわいいな。食・べ・ちや・い・た・い・な？」

「ひいひいひい……っ！」

楽しげに頬を擦り寄せようとする男を無理やり離そうとすると、急に体が離れた。自分の力で離れたのかと思い、うつすら閉じていた瞼を開けると、ベンチから立ち上がっている男は、星を見つめていた。

「……ちつ。奴が帰ってきたみたいだな　そんじ

や嬢ちゃん、またいつかね？」

ひらひらと手を振る男は、暗闇に姿を消そうとしていた。

「……あ！貴方の名前は何なのよ！」

「あれ。気になっちゃった？照れちゃうな」

「そっちの意味じゃないから！後で復讐するための資料よ……！」

「そりゃ〜楽しみだな。また会う約束してくれるなんて」

「だから、ちがつ……！」

「オレの名前は、スコッチ……とでも言っておこうかな？じゃあね、オレの『ウエンディ』」

「何で私の名前を知って……え？」

ずっと寄ってきた男　スコッチの顔がウエンディの顔の横に
来ていた。そして、結い上げていて髪がない、首筋に温かい『何か
が触れた。

「ひゃっ！」

熱くなってきた首元を押さえて立ち上がったが、もう目の前から
消えた男にきよんとしていた。

二十九章（後書き）

アラン：ああ、ウエンディよ。なんで君はウエンディなんだあ

・・・だいぶ痛いことになってる馬鹿兄は、ほっときましょ。

アラン：って、作者。ウエンディは、どうしているのかい？

あ、やるんですか。どうって・・・えーっと。妹馬鹿シスコには伝えない
ほうが良いかな・・・うん。伝えないほうが良いな。

アラン：一人で納得しないっ！いいさ。この作者に聞かないで、ウ
エンディに聞いてくるから！

え・・・っと、聞かないほうが身のためだと・・・。それに次回は、
本編しないし。

アラン：・・・ふむふむ・・・なるほど・・・（読んじゃってる）。
こ、この良く分からん男め！切り捨ててやるっ！！

もしもーし。目が血走ってますよー。

では、次回もお楽しみに。感想・ご指摘お待ちしております。

おまけ ウェンディに50の質問。

01 お名前をどうぞー!!

えー、ウェンディ・ダーウィンです。

偽名は、ウェンディとダーウィンをウィーダンに変えた二つですかね・・・？

02 性別は？

女です・・・他に言うことないので、次っ。

03 誕生日！

秋生まれで、この間16になりました。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）

金髪で空色の瞳です。今は、黒いリボンでポニーテールにしてます。

05 動物に例えると？

うーん。猫？ウサギ？・・・わかんないですねー。

06 特技は？

最近は魔術を使えるようになったことですかね？動物によく好かれますし。

07 ご趣味は？

お忍びの買い物かな？

08 将来の夢など

ダーウィンを取り戻す！！あとは・・・魔術を上達させたらと。

09 好きな言葉とかある？
穏便に、ですかね？

10 好きな動物は？
猫力ナ？ジンを抱くと暖かいし、ふにふにしてて気持ち良いの。

11 好きな色
空の色かな。蒼く澄み渡った色も、夕焼け色かな

12 好きな料理
甘いお菓子とかですかね。小さい時、ボルトによくクッキーとかもらってましたよ。私の口にひよいと。

アラン：いや、アレは《餌付け》^{えづ} だろ・・・

13 好きな異性のタイプ
優しい人ですかね・・・あの王子様^{リチャード}は論外デスっ！

14 好きな同性のタイプ
ジョージアみたいな大人な人かな？

15 座右の銘は？
うーん、好きな言葉と同じですね

16 暇なときなにしてる？
魔術の練習！

17 旅行とか好き？
ずっと城に居たので、外をあまり知らないのもっと知りたいです

18 癒されることって何？

ジンの首元を搔くことかな？

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

エレナかな？・・・まあ何考えてるかまだ分かんないけど、笑顔が素敵なので

20 ぶっちゃけその人は恋人です!？

いや・・・同性ですし・・・。

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？

うーん。料理は苦手かも。

前、アランにパンあげたら、二、三日目を合わせてくれなかったもの

22 それを解消するために何か努力はしてる？

今は、特訓中。

セバスチャンに教えてもらってるけど、いつもアランに味見してもらうと涙目になってるけど・・・

23 じゃあ逆に自慢できることは？

髪・・・かな？けっこう手入れは頑張ってるの

24 人生で一番嬉しかったことは何？

ジンを見つけたことかな？

25 人生で一番驚いたことは？

ボルトが、いきなり軍に志願したこと

26 人生で一番楽しかったこと

小さい時にボルトとアランとにかけっこで勝ったことです

27 人生で一番怖かったこと

私の部屋にお化けがでたことです・・・。

アラン：実際は、ただ風でカーテンが揺れただけだったけど

28 人生で一番辛かったこと

お父様が亡くなったことです。そのあと、すぐに城を出てしまっ
たし

29 外向的？内向的？

内向的です。悩んだらとことん悩んじゃいますし

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
届けます

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
寄付しますね

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？

拾っちゃいます。あ、でもジンと喧嘩しちゃうかな。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
素直に受け入れます

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
謝りに行きます、すぐに

35 嘘はつけるタイプ？

いや……。不可能ですね

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
ええ。バレマスネ。顔に出るらしくて

37 何か癖ある？
髪を手で梳くことですかね。

38 誰かに何か言いたいことたまってる？
あ、この間のことで、けっこう。

39 あるって答えたそのあなた！ じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください
い！！！！

リチャード王子とスコッチ！！私を……。か、からかうんじゃないわよー！！

40 ……酸素マスクいる？
はあはあ。もらつときます。

41 あなたにとって一番大事なものは？
偶然だけで見つけた、ローズクォーツのネックレスですね。

42 自分といたらコレ！ みたいなのある？
空色の瞳かな？

43 崇拜してる人とかいる？
団長さんですね。なんか、こっつ、オーラがすごいです。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！

あら。届け出たしますか。

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
勘が良く当たることかしら

46 こいつには敵わないっていう人いる？
フリッツさん！！（即答）
……こ、恐いです

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！

え……。うーん。好きな人は今いないので、フリーですよ

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場ってどうよ？
キャラがぶれすぎだと……。作者さん、どうにかしましょうよ

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！
……私の男性運悪くないですか？

50 ここまで読んでくれた方に何か。
ここまで読んでいただき、ありがとうございます。これからも私自身奮闘していこうと思うので、よろしくお願いしますね？

「Water Future」
<http://waterfuture.finito-web.com/orichara50.html>

三十三章

「調査依頼が来ているから、近隣の村まで一緒に来るか？」

ウエンディは、ジョージアの自室で、お茶をしていた。

ウエンディは、意味もない話を何度も繰り返すので、仕方なしにジョージアが口を開いた。だが、その言葉にウエンディは、驚いたように目を点にしていた。

「え？」

(始めに驚かされたのは私なのだが……)

ジョージアは、自分のカップにやっと口につけると、ぼんやりついさっきのウエンディを思い出した。

「お邪魔をしに来ました。お茶しませんか？」

なかば押しかけたように入ってきたウエンディに目を丸くしながらも、ジョージアは、湯を沸かし出した。

ウエンディは、すぐ近くにあった椅子に座り込むと、膝に乗った黒猫を機械的に撫でながら、宙を見つめていた。

「急にどうした。朝は、フリッツとの魔術練習をしていると聞いていたが」

「今日は、休みました」

夢を見ているようにボーツとしているウェンディは、たんご譚言のよう
に言葉を漏らしていた。

『おい。昨晚何かあったのか?』

ギクツと肩を上げる姿を見ると、何かあったことはバレバレだっ
た。

『えっと。今日も天気悪いデスネ』

顔をジョージアから背けて、話を逸らそうとしたが、その日は、
秋晴れのいい天気だった。

『………晴れてるが?やっぱりお前、本当にあのパーティー
で何かあったんじゃない?』

『あああ!!ジョージアさん、天気悪いデスネ』

無理やりジョージアの言葉を遮ったが、また同じ内容を話してい
た。

(何がしたいんだ。この子は………)
ウェンディ

呆れ顔になったジョージアは、ふと自分に来ていた依頼を思い出
したので。

「調査依頼……ですか」

「お前は、依頼を受けたことは無いから、気分転換にでもどうだ?
いつも魔術を行うときにフリッツだけじゃつまらないだろう」

ウエンディの膝の上で寝ていたジンも、いいんじゃないか、と賛成した。

「じゃあ、準備します」

ジョージアの部屋から出ていったのを眺めながら、ジョージアも自分の出かける準備を始めた。

ウエンディは、護衛兼調査の依頼者として、国軍の中の一隊の隊長との待ち合わせに指定された城の中庭に着いた。そこに待っていた人物に思わず突っ立ってしまったっていた。

「な、何で殿下がいるんですか?!」

ウエンディは、肩にジンを乗せたまま、ワナワナとその殿下シチャードを指差していた。

黒髪の青年は、ウエンディの声に、腕を組んだまま煩わづらそうに、振り返った。

後ろから着いてきたジョージアは、柄がらになく申し訳なさげにウエンディに説明しようとしていた。

「何でと言われてもだな……殿下の部隊を選んだのは、エレナだし」

「エレナが?!」

思わず王子の前だということ忘れて、声を上げてしまった。その声に、仕方なしに口をリチャードは開いた。

「そつだ。彼奴はいつも何かと理由をつけて、俺を使いたがるが、今回ばかりは意味が分からん。しかも、副官をいつの間にか奴にすり替えられていたし……」

無表情の顔に眉間の皺が、深くなって、いかにも機嫌が悪そうな様子になっていた。

「エレナ……さんってそんなに偉い人だったんですか……」

後ろのジョージアに聞こうと、ジンが乗る右肩ではなく、左肩越しに振り返る。だが、最初に目があったのは、ジョージアではなく、息がかかるか、かからないかの距離にある、一つの青年の顔だった。

「エレナが、って言うよりもエレナのお父上が、って言った方が正確だろーね？今はエレナの兄君が継いでいるけど、元サファル国軍司令官だったから、軍内の権力強いしー。どうせエレナは、父君に良い顔して頼んだろーよ」

「……そうなんですか」

青年の顔は、にこにこの笑顔が機嫌良さそうに浮かんでいた。

「ほーんと、いつもウエンディはかわいい……っ！！」

口説く言葉がウエンディの『手』によって無理矢理遮られた。何故なら、ウエンディは、あくまで冷静に、近くの顔の頬を両手で挟むと、クイツと顔を逆に向けたからだ。

青年の顔　もとい、ロジャーの顔が、勢いよく離れた。うつすら涙が浮かんでいた。

「あいたたた。首がおかしくなっちゃうよー。それに、こんな扱いヒドイよー。君ってそんな子だったあ？」

「あなたに会ってからそんなに経ってませんし、今はジョージアさんのを真似しました」

いつもジョージアがグリンのアピールを交わすのに使う手の一つだった。

「ジョージアー、変な技教えないでよー。ボクがウエンディにアピって、危なっ！！」

ロジャーがひよいと急に屈み、彼の後頭部があった場所を誰かの手が思いきり空を切った。

「いい加減にしないか、タヒュテイン卿。無駄口なんか叩いてないで、俺の副官なら、副官らしくしないと外してもらっよう、現司令官の従兄殿に頼んでくるが」

先ほどより眉間に皺が深くなっていた。

しかし、リチャードの機嫌を悪くしたことをさほど気にしていない様子で、馬を連れてきまーす、とすたすたと走り去ってしまった。

外伝*ウエンディのパン

「ねえ、ボルト。今度のアランの誕生日プレゼント、何がいいと思う？」

「んあ？何だよ、突然急に」

ボルトは、読んでいた本から目を上げ、キラキラした目で問うウエンディを見た。

「来週は、アランの十六の誕生日でしょ。去年は、毛糸の手袋をあげたから、今年は何が良いかなくて」

「『春』に、毛糸の手袋は明らかに季節外れだったがな。アランなら何でもいいと思うぞ。お前が作ったものなら何でも」

ウエンディの手作りと分かると、いつもボルトに自慢してきて、数日ずつと暑くなるのも気にせず、つけ続けていたのを見ていた。それに加え、調子をよくしたウエンディは、城内の兵から下働きまで全員の手袋を仕上げてしまった。その結果、暑くなるなか、しばらくは着けていなくてはいけなくなり、『姫の手袋』として、ある種の恐怖話　もとい、伝説になっていたのだ。

「あ！！そうだ。何か食べ物とかはどうかな？私も一回作ってみたかったの」

「いいんじゃないか？それじゃ、俺は読書……」

興味なさげに、また元々読んでいた本に目を戻そうとしたが、ボルトの手から抜き取られた。

「ついてきてくれるよ、ね？」

妙な眼圧で、問答無用で厨房に引きずられてしまっていた。

「それで、今はウェンディは何をしているんだ？」

アランは、王都に行っている父親の代わりに、領主代理として、民からの嘆願書らに目を通していた。結局、昨日はウェンディに付きっきりで付き合わされていたボルトを呼んで聞いていた。

「あー…何て言うか…アレは料理と言っているいいんだよね？そう、料理、ではあるんだが、どちらかというと工作的要素がいつぱいな気が…」

しどろもどろに目を泳がせていた。嫌な感じの冷や汗まで浮かんでいた。

何を言っているんだ、と嘆願書から目を離れたアランの目は、言わんばかりの色をかもし出していた。

「変な目で見るなよ…俺だって居たくて居たんじゃないし、食べさせられやしないか、ヒヤヒヤしてたんだ…」

年上の兄のような存在だったボルトがここまで怯えているのは、見たことがなかった。

もう少し聞こうとしたが、『ドゴーンッ』という衝撃音が城内に響いた。

「…敵襲か？」

アランは、目を険しくして嘆願書を机に置いた。
ボルトは、アランに動かぬように目で合図すると、扉をそっと開いた。

「…何があつた？」

扉の外にいた兵に尋ねると、慌ててはいたが、きちんとした敬礼で答えていた。

「連絡は何も来ておりませんが、爆音のようです」

「賊の可能性もある。この爆音原因を探し出せ」

ハッ、という返事があると、走って他に伝えに行ったようだ。

「^{アラン}若は、安全な場所へ…」

ボルトは、抜き身の双剣を鞘から出すと、アランに改まった顔で言ったが、アランは、空色の瞳を曇らせていた。

「いや、それは不味^{まず}い。ウエンディは、厨房にまだいるだろう。まず、ウエンディを保護してからにした方が、賊に割く兵の数を増やせるだろう。僕とお前と警護とでウエンディの方へ行つた方が早い」

壁に掛けていた自分の剣を取った。

「うむ、そうしよう。行くぞ」

さっと扉の外の様子を見ると、近くの兵達に着いてくるよう言つたと、厨房に向かった。

厨房の中からは、何やらボタンボタンという音が聞こえた。

「ここ…なのかもしれないぞ、賊は…」

アランは、唇を噛んで剣に手を掛けていた。

兵に厨房の両側につくようにボルトが指示すると、タイミングを見計らっていた。

「落ち着け、アラン。中で何が起こってるか分からないんだ」

ボルトは、落ち着いた声でアランに告げた。

「三、二、一、で扉を開ける。まず、お嬢様を保護して賊がいるか、ウエンディ各々で見渡せ、いいな？」

周りが頷いたのを確認すると、双剣を構え直し、数を唱え始めた。

「…三…」

重心を下げ、動きやすい体勢になった。

「…一…」

張り積めた空気になっていく。

「…！！」

扉は開かれ、どっと厨房に入った。しかし、目の前にあったのは思いもよらぬ光景だった。

「な、何をしているんだ…ウエンディ…」

丸焦げやら歪な形やらと、様々なパンに埋め尽くされた厨房の中に、粉だらけのウエンディが一人立っていた。

「あら。どうしたの？」

いつも通りの明るい声だった。

まだ辺りを見渡していたアランは、剣から手を離さぬまま、ウエンディをチラリと見た。

「どうしたの、こうしたのじゃない。賊は入っていないな？」

「賊？何のこと？」

きょとんとした表情のウエンディに、ボルトは何かを勘づいたようだ。

「もしや…。ウエンディ、大きな爆発音を聞かなかったか？」

「えっ？もちろん聞いたわよ」

その次の言葉に、ボルトは、やっぱりな、と言いたげな顔になり、それ以外は啞然とした。

「だって、ここから出たんだもの」

そう言って、指差した先は、パンを焼くための竈かまどだった。そう、『ドゴーンッ』という爆発音は、ウエンディがパンを作っている最中に出した『パンの失敗』を示す爆発音だったのだ。

兵に元の持ち場に戻るようにボルトが指示すると、壁にもたれかかった。アランはウエンディにその場に座るように言った。そして、自分も床に座った。

「ウエンディ。兄にこの惨状を説明しなさい」

「うん。パンを作ってたの」

話を読めず、苦い顔をしていた。

「…それで、どうして爆発音が？」

「パンにトウモロコシをたくさん入れて、焼いてみたのよ。そうしたら、何故か爆発しちゃって…あ、でも、他のパンは結構よくできたと思うの」

そう言って指したのは、何故か魚の顔がチラリと覗く、恐らく魚を丸々使っているだろう、見るもおぞましいパン　のような物体だった。

「…これ…パン…だよな」

「もちろんっ。あ、早いけど、アランには、誕生日プレゼントとしてあげるわ」

そう言って差し出されたのは、今度は見る限り普通のパンだった

ので、ほっと息をついた。

「じゃあ…いただくよ」

パンを受け取り、食べようとした。

「待て、アラン！早まるな！！」

ボルトは慌てたように止めようとパンに手を伸ばしたが、遅かった。

めきよ

怪しげな音をたて、アランの口に消え　　そして、アランは力なく倒れてしまった。

「ちょっと、アラン！！」

遅かったか、とため息をつくボルトは、チラリとアランが食べたパンを見ると、レモンが丸ごと入っていた。卒倒したアランに同情した。

そのあと、騒ぎの具合を聞いたウェンディは、謝罪の意を込めて、パンを配りに回った。

だが、ボルトから食べぬように釘をさされていたため、興味本意で

食べた者以外食べなかった。興味本意で食べた者は、二、三日、医務室にお世話になった。

このことは、『姫のパン』として、伝説として語られるようになり、同時に『ウエンディお嬢様のパンを食べるべからず』という教訓が広まった。

そして、現在。

「ねえ、アラン。また作ったのよ。食べて？」

セバスチャンに教わって作っていて、怪しげな色合いのパンを差し出していた。

「…すみません。アランさん…今回は、これ以上どうにもなりませんでした」

うつすらセバスチャンの目には、涙が浮かんでいた。

「…ウエンディ。今度は何を入れた…？」

「トマトと茄子とキュウリでしょー…それから」

「も、もういいっ！頼むからやめてくれーっ！」

アランの悲痛の叫びが、サファル王都城に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3889g/>

漆黒と黄金の物語

2010年10月8日12時12分発行